やまと物語

へ12
1082

清水濱臣藏書

特
門へ 利 12
請 1082
巻
12

一

亭子院乃みかといまハおりゐさせ給ひなんとしける
ころ弘徽殿乃かへに伊勢乃御のかきつけゝる

わかるれとあひもおしまぬもゝしきを
見さらん事のなにかかなしき

とありけれハみかと御らんしてそのかたはら
にかきつけさせ給ひける

身ひとつにあらぬはかりをおしなへて
ゆきめくりてもなとか見さらん

となんありける

二

みかとおりゐ給ひて又のとしの秋御くしおろし
給ひてところ〳〵山ふみし給ひておこなひ給
ひけり備前のせうにてたちはなのよしとしと云ける
人内におはしましける時殿上にさふらひける
御くしおろし給ひけれハやかて御ともにかしらおろして
けり人にもしられ給はてありき給ひける御とも
にこれなんおくれたてまつらてさふらひける
かゝる御ありきし給ふいとひんなき事なりとて内より少
将中将これかれさふらへとてたてまつらせ給
ひけれとたかひつゝありき給ふいつみのくにゝいたり
給ひて日根といふ所におはします夜ありいと
心ほそうかすかにておはします事をおもひつゝいと
かなしかりけりさて日根といふ事を歌によめとおほせ
事ありけれハこのよしとし大徳

ふるさとのたひねの夢に見えつるハ

うらみやすらんまたとゝはねは
とありけるにみな人なきてえよますなりにけり
その名をなん寛蓮大徳といひてのちまて
さふらひける

三

故源大納言宰相におはしける時京極のみやす
所亭子院の御賀つかうまつりたまふとてかゝる
ことなんせんとおもふさゝけものひとえたふたえ
たせさせてたまへときこえ給ひけれはひけこ
をあまたせさせ給うてとしこにいろいろにそめ
させ給ひけりしきものゝおりものとも色々に
そめかさりくみ花なとをして九月はかりの
ことなりけれは

きこえけれはくそみ十月のつこもりはかりにさも
のいふことなき人のかとおほせたりける
ちゝのかゝりけるにこそ枝は色ふかゝりけり
御車をもてまかりておなしことをそめまかりし
そのかみのいそきにおかしとて中はしめこれよりて
かゝりけるにいひけるにおもほえかゝりはへらて
ことなりけるをかへしけるにもうちかへしての
御ことはかりけれは
ことはけり御車にのせてまかりしかなかの
御かたにはひとつたまはせ
とかくいひけるをきゝてしはしはせしめ
えかかりけれは御とのこもりにけるなかに

ねむをけふかゝるさかんにいそぎありけるをおきて
わ細やさみのいとうらゝかくのしと弟かり
そが日しもこそあなめいとけれ
とそなかん庭りなまくりそれハいとにかくめてく
のちまでなんかたりける
野大弐すみとものさわぎの時うての使にさゝれて
てかなしくそりけるおもゑけにしれてふまあ
四位りとなるべき年にあたりけれハむつ
きのかゝいたまはりのふみに掲しうゑしされと京よ
りまうでこざりしかばわたくしにもとに宮位にかり
けりとあいふわたくしにすさとにきさゝかるより
いそうれしかりと京に京のたよりあるにやりける

五節のこさの文をかんすそうろいと掲りしう字はと
志うておはするにたれかはかりみせかれそいさ
て月日かと書くとくのうちりかくなん
たまくしけふたとせあはぬきみかみを
あけながらやハあらんとおもひし
こまやと見るにうれしかりてなんかきける
四位にかられぬよしもかの家にはかくてなん
かれありける
おほ路乃君うせたまひにけれハ大輔さかりかしく
のこおかゆかりしさいの文をたちにまゐりて
なりにけれハ稀にしそ来つけりさきれハ
よろしくていひけり

まひぬまてはいまこそ物とおもひしかも
こゝろにしぬへきかみなりけり

六

あさたゝの中将人のめにてありける人にしのひて
あひわたりけるを女もおもひかはしてすみけるほとに
かのをとこ人のくにのかみになりてくたりけれは
これもかれもいとあはれとおもひけりさてよみて
つかはしける

たくへやるわかたましひをいかにして
はかなきそらにもてはなるらん

となんありける[illegible]

七

男女あひしりてとしへけるをいさゝかなることによりてはなれ
にけれとわすれてやありけん[illegible]

まさかれ男も家をたえ[illegible]かんやとさ
やりけり

わすれなは[illegible]のひとおもひへやも
かゝるにたえしとねわすれそにけり

八

女いとわりなしとおもひけり
監(けん)乃命婦のもとに中務の宮おはしましかよひける
をかたのふたかれはこよひはえなんまうてぬとの
まへりけれはその御返事に

あふことのかたはさのみそふたからん
ひとよめくりの君となれゝは

とありけれはかたふたかりけれとおはしましてなん
かれありけるのとこよひもえおはしまさて文ひさしくおはしまさ

りし給ひたりけるにさうの院にかりしたまひてかれは
さうせさせ給ひとよませ給ひけるにいたくおもひ
ゆかなく思ひわひんかくのまゐりけるをかへり
おもふことのいけのたえせはたえぬとも
かさねつゝゆくせきもやのはなこ夜
ゆかへしはこ。

九 ももそのの兵部卿の宮うせ給ひて御はてのこと九月つ
こもりにし給ひけるにとしこかの宮の北の方
にたてまつりける
おほかたの秋のはてたにかなしきに
けふはいかてか君くらすらむ
となむありけるかへし

わくとなくなへてこそおもほえね
なにはりもわかくくるゝはけふのくれ
とかへしありけり

十 監の命婦つゝみにありける家を人にうりてのち
あはたといふところへいきけるにそのいへのまへをわたるとて
よみたりける
ふるさとをかはとみつゝもわたるかな
ふちせありとはむへもいひけり

十一 故源大納言の君たゝふさのぬしのむすめ東の方
をとしころおもひてすみ給ひけるを亭子
院のわか宮につきたてまつり給ひてはなれ給ひ

十二

なしありけるにこそたりしをもしとてなむ
すこしあひだそこなみくらしあひけり

拾遺
すゝのほの雲ゐになりぬとも
そらゆく月のめぐりあふまで

とありければかへし

同上
こひしくはおもひもしぬべきすゑのまつ
まつやまちつゝひさしかるらん

となむありける

十二
おほくのこのみこは元良親王てみことかはし
させそまりのけりといにあらずてく
ものへひきあひみてかくて
新古今
わたくしはきみのえりのみの

ゆめとこそいひしとぞおもひのこゝろみ華

十三
むまのせう藤原ちかぬといふ人のめにいましく
としこといふ人なんありける子どもあまたいできてく
住けるほどになくなりにけれはかぎりなくかなし
くのみありけるに内の蔵人にてめしありける
一条の君といひける人はそのとしこにまへり
けり人なりけるほどに成にけりしかもとはさて
ことにおもふことありけるになにゆゑなのます
その女たんなりけるとかなくしかなむ

おもひやるすまひをしとひとのかたきみ
たえしはかなしなんをとこ

としこよくかひけるかへし

あふさかもはてはゆきゝのせきもゐず
たづねてとひこきなばかへさじ

十四

本院の北の方の御おとうとの童名をおほつぶね
といふいまそかりけり陽成院のみこにすみけり
まかなひけるをおもひおはしまさずなりにければ
つりけり

わがやどのきくのしら露けふごとに
いく世つもりてふちとなるらむ

十五

又つりどの院のみこのひとりごゝろをえて
まゐらせけるにいかなるおりにかありけむ
たえてひさしうおはしまさざりければ
ひとりゐてよめりける

とよらにしあはれなるかなさもあらばあれのこ
まつかゝるやまかげのまつかげにみえけれ

十六

陽成院のすけの君ときこえけるもとに
たちのぼりはべりけるほどにあさましくなりにければ
おもひわびてよめりける

おほかたはゆめのうちにぞありけれ
かねてしりせば

まゆのうちにもおもひしをこそおなじ草
つゆときえなんのちはなをかも夜

十七

故式部卿の宮のいでゐの御ごと申しけるをうけたまはりて
めとりてのちに女すみけるをもてつかはしける
座りたりけれはおなじ

わすれじとおもひしものを草のはに
すみし

十八

れいしくおもてこそしかりける
いせしきの子あし
それにしもみえしたまはし[illegible]
故式部卿の宮二条の御息所にたえ給ひて又のとしのむ
月のなぬかの日わかなたてまつりたまふとて
ふるさとゝあれにし宿の草の葉も
きみかためにはまつつみけり
とありけり

十九

おなし人おなしみこの御ためにこれかれ[illegible]
まさ[illegible]
世[illegible]

すみよしの[illegible]なすれ
とありけれはかへし
[illegible]
[illegible]

二十

故式部卿の宮の[illegible]
[illegible]
[illegible]月の[illegible]
[illegible]月の[illegible]
ゆ[illegible]
とありけり

二十一

良岑義方

良少将兵衛佐なりける時監の命婦になむすみける

為女のもとより
うつ紀のありけれハ命婦兼茂とも
まつとふらんかはれともおもへ
也し
かしこまりのありやにれ命婦兼茂のよふに
うらみおもひはれしもののかなしかり
と在れはかへり
良おもちあらの絶よりすくきみとてとりくめくれハ監
命婦なむよりもまとふとおもひつゝ也
さりけれハ
わすれんことのあらそりしそめる
いふのみさとむくやまさかん

とよみたりけれハ監命婦なむてかへりてしく紀
て歌りおくり
陽成院の二の御子後蔭の中将のむすめに年
ころすみ給ひけるを女五のみこをえてまつりけるを
婚ふらぬとひなかりけれハいみしくおもひしまり
さかありもなひけれていとわひしくなむおもひ
かゝるいとゝおもはるゝ思ひけれハ又
おもしたりけるハえもおもはてたえなきを
そのふかいりかまりとそおもひれかかな
かとゝ年ころのをまやれとんとてまて家
田しかてきみなしやとえかれてかゝて
くかん

めてたくかへりてとしもとめやりけり
一本ニ後とかゝれとかけり 古今よのそらけとなり

せうそこすれどえあはでしとなむいひし山ざとの
なまめきの急とうてもてなさん

せん帝の御時に右大臣殿の女御うへの御つほねより
まうのほり給ひてまち給ひけるにおはしまさ
御ともさふらひ給ひてまちけるにおはしまさゞりけれは

拾遺

日くらしに君まつ山のほとゝきす
とはぬ時にそこゑもをしまぬ

とかんのし奉り

ひえの山に念覚(明覚イ)といふ大とこのありけるをは
ありける師(或云侍読)みまかりにける太政
のおほむむつに松のみをくはせける
みそ

ぬしもなき宿にのみかれしまつのみや
千世をへけることになむありける

とよみけれはのむつ(?)に三条のありけり
こともあはれなりけるにかへりていひせなりて
桂のみこにいとみそかにあひ給ひける男
けり奉りけるをこのうちに聞しめしておほせなりける
それをしたにみなかくれやくとも

古今読人不知

ことさらにかのもろもひとのきゝつるに

となんありける

おなしせうとの大徳は師にまかりて山にはせこもり(不審)
わうひかりけるひとのかりにあかねのもとに
たまへかしなんわすれやとせたりけるそいひかはしける

思[illegible]もえ[illegible]て[illegible]

[illegible]陰陽師[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六帖

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六帖一 如

[illegible]

[illegible]

[illegible]三条の[illegible]上達部[illegible]

[illegible]

[illegible]女郎花[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

とはまうりし家に
右大将のうし家平の君なりけるづくされたりけるに我かの
えなりけるねるもとさひのひろこうかの亭子の
みかどに紀伊国よりなるつきたるみなとかんなり
たりけるを影にくく人て奉らせたまふに右大将のうし
あきかはの世に帯ひのうらに亀つるの
かよりにさるやまれぬ青葉ん
おなじ右大臣のうし監の命婦
よろそかくさひしのりもせかはの浦
見えまてめぬめそてたりなりけり
亭子のみかとにかうまつりのうし給て奉なり
かう

わかきてみむひとまかわかつむさとのく
葉なきにさとをあらるにられ

又

志くれのはやまさくちはや志る
とりひとりもやかりけるさかれ
とありあまぞなりえたまなほうつなりなり
みかとれらんしと帯をてしみとたく
そうの君のなれ見せ折てたるとくしたれ
うひかりなんありし心をなりけり
粉垣の院なりけるにてあたりまうりけり
まちかぬるむろのやとしけれてきゆるは
とりのかはつれにゆりもむかし秋のうきを

右京のかみのむすめ女

[illegible]

[illegible]

兼輔

堤乃中納言乃御使にて大内山の院のみかと…

[illegible]

[illegible]

九重此道

[illegible]

[illegible]

新勅撰

伊勢乃国に斎宮乃おはしましける時勅使にて…

[illegible]

[illegible]

[illegible]

出雲

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

壹岐 和多田木

[illegible]

[illegible]

[illegible] 和田[illegible]

かくてまかりにけりいねとこそよ

三九

伊勢のかみもろみちのむすめをたゞあきらの中将の君にあはせたりける時にそこなりけるうなゐをなん左京のかみはひそかにかよひけるにあはせてぞおこせたりける

とくゆくのりをもまちぬわさくれは

見ゆるとてもしくはありける

四十

桂のみこに式部卿の宮すみ給ひける時その宮にさぶらひけるうなゐなんこの男宮をいとめでたしとおもひかけたてまつりけるをえしり給はざりけりほたるのとびありきけるをかれとらへてとこのわらはにのたまはせければかざみの袖にほたるをとらへてつゝみて御覧ぜさすとてきこえさせける

つゝめどもかくれぬものは夏むしの

身よりあまれるおもひなりけり

四一

源大納言の君たゞふさのぬしの御むすめひむかしの方を年ごろおもひてすみわたり給ひけるを亭子の帝めしてにはかにまゐらせ給ひければ文をだにえやり給はでおもひわびて

はかなくてよをすぐしけるうきことは文もえかよはぬよになりけり

むかしのおもひやいかゞとぞきこえける女の返しもありけれどそれはしらず

御息所の家よりいでてさとにてもありけるをおなじ所にすまぬことをいとおもひわびけりよろこびもなくて世中にのみありけるをなげきてぞ

とぞきこえける

あるしのこらし新よめる

　ひとはしも世はなきものとしらさほは
　　わかまへとゆく君かみしはし

とらし新るは過てふ見しかせてわかれて
うつせかんかきらかわやしかりけるのちにおくれ
ありかりけれ
ひえ志とゆふかしのかた人乃御強着かへまゐり
けかれとゝりなく世中にはなきけれはもすけり
かくとは少女屋りはさうしてゑたるのゝ

　そこふかきこかなきすかやかなり舟せ

とかん盛けつ又ひ人の御りしかきうりけり
あさかく着ちりすちは庭のしりかつら

なにはそはひかくらあなひ京ん
ひのたとく廣かりけるそのまへにきりけるとは
むかしこ鋪けるその夢うけてなかさき御前は
まろ紀はる衣あめのうつみえうくきまるの
わかれし物せやまの中
おとこひとかくかひしかけきさ山になのかかんとは
といひくらかへそりれてつくいつくめつかんとひは
てかなき山まとりおりゐぬとかりしみつうきに
いひやりまひふかりけまれ

　なみかりみつくもゐにほのかのつるの
　　ひえをともやましみつそりなり

とかんてりけつよつれといふとてあふみをかん京里

四十四

おなし人ゝりあひたる人山へいりけるに女もくしてありけるを
くやありつることゝいひやりけれは
うかりける山のいほりの井の流れて
見しほとのかけをもわすれやはする
とそいひおこせたりけるに返しはよみてやりけれと
かへりことはいはさりけれは
わひしき事を
わかあまりにけるかな

四十五

つゝみの中納言の君十三のみこの母御息所を内に
奉りけるはしめにみかとはいかゝおほしめさんなと
いとかしこく思ひなけきけれはみかとによみて
奉りける

ひとのおやの心はやみにあらねとも子を思ふみちにまとひぬるかな

四十六

先帝の御時に承香殿の御方にさふらひける
ゐた人さて継母
平中かれかれのよそになりてはへりけるを
なかりけるそのゝちなかのひとつにたえて
なかとけて春のゝつれつれなるほとに
つゐにこのなかれおもひそめし
女の身し
ちかきあたりなとおもひつゝ
あはれとはたれかいはましかくてのみ

四十七

陽成院の一宮のきさき

桜さくをかしけれはをかしきと不案あたらん

かつまはこゝろをさへにかけてこそ
あかなくにちりぬるはなのいろをみよしのや
出ん帝此御時紀貫之ことゝへる折よみ侍りし
夜のまくらにゆめちかくみえし折から
折ふしに思ひつゝけゝる
新古今 亭子院御製
おもひきや[illegible]ゆめのみちかけはなれぬや
よそにのみこゝろをとけ侍るかな
おほしみゆる秋院乃みたけの御けしき蘭の花につけて
ゆきそみぬるたのむかとおもひきて
おもふことやかてこのよのこと
秋院乃御かへし
こゝろさしのはおもひしるこそあはれなれ

よそにてもみつゝこゝろのはるゝ夜の月のかげみよしのや
かひせん山のおくのやま
なにおもひてうらみかこつらん月のよの
うきことにありてぬるよのつゆけさは
斎院にまいりし
おもひしるこゝろをさへもそへてこそ秋かぜしらぬ
ひわりてかくかたもなき御ふみ
御返し
たのみつるかなしきことをみるにつけてもいまはかなしき
ふかきえにしのうらみはいはじとおもへども
こゝろの内の御かへし
まことにもゆめかうつゝかえこそわかれね

八十二
うらみらまぬへのてりをありけり
陽成院にありける坂上のとをみちといふおとこ
ゐんにありける女さらにありとてわかさりなれ
わきのことゝらんしもまちしや
あけてさえりぬのとはおもひらん

八十三
右京のかみむねゆきのきみの三らふにあたりける人
くやうとしておやにもはらからにもにくまれけれは
あしのむかんかたへゆかんとて人のくにへいきけるに
ておもひけるともたちのもとにいひおこせたりける
しなりしくゆくはひまもとかりそめ
いのちしらはまたありしもせし

八十四
男のかりかくいひおこせる女をおきて人の家へいふなり
いつまとしきのれあたらしかひてこそかはれ
なかれてくるかりもしらねまは
わすれりとけしとおもへとそゆかし
となんいひける

八十五
越前権守かねもり兵衛のきみといふ人にすみけるを
としころありてはなれて又いひかよはしけるに
女さらにみちもしらすなかさとは
かとさしるまよはせてそゆく
女返し
渡りてそゆくせたにかれはあかくも
人のこゝろとおもひのけ家の神

八十六
あふみ介平中興むすめをいとかしつきける

とおもふかく数て後くらすまて人の君をまちかね
所に住けるをおかまとりてのみゆりの使ていそきけり
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
同しかねもりみちのくにてかん院の三のみこの聟
になりける人くろつかといふ所にすみけり そのむ
すめともにをこせたりける
みちのくのあたちのはらのくろつかにをにこもれり
[illegible]
といひけり かくてそのむすめをえんといひ
けれハおやまたいとわかくなんある いまさるへからんおりにをと
いひけれハ京にいくとてやまふきにつけて
はなさかりすきもやするとかはつなく
ゐての山ふきうしろめたしも
といひけり かくてなとりのみゆといふ事を恒忠の君
乃女よみたりけると云なん此塚のあるしなりける
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

て京よりのぼりたりけれは心くるしくてゆかりを
し新たにおはしませくしくたりけれは人
井手の山吹をしるしにと思けるをこれ
かれこれの人のはしめてかくせなりける男

ことしとてぬきつけつゝてなと
なかなかみにくらへしかはしりぬらん

ともありけるおもしろかりけれはよしへまかりけ
人女のもとにおかせたりけり
あはれやとおもふそこらをしりつゝも
うさはかりますこのふかさりけり

又男のこともよみける男のもとにあけくれ
忘れかたくて女のもとにひんかしのとなりける

くらゐにせんかたなくおもひけれ
なほしておもひけるしなけれと
なかりけるのにいつありけれ家

亭子院に御息所たちあまた御曹司して
すみ給ふに年ころありて河原院のいとおもしろく
つくられたりけるに京極の御息所ひと所の御曹
しをのみしてわたらせ給ひにけり春の
ことなりけりとまり給へる御曹しとも
いと思ひのほかにさう〳〵しき事をおほしけるに殿上人
藤の花のおもしろきを折りて
んせしかはとりて人おもしろからむ
つけたりけるはそれ

世中のわかれもせぬめのなかりゆけは
このかたのかたへとてかへしけるを
しのひたるをかしかりけるそわかみとりけれは
かみかへしのきたまつるとなむしけり
わかしことのいはひ奉り
ふちのゑ御にかのむかへも見ゆるかの
うつろひゆけるたよりたなや
のうちにのさみとえひさる人浄蔵とふいひとりけり
かたひにおりたりけりなしらとりてかならをそ
えひろしかりのうちにのさみ
おりふてかへるにとれありけるを
むかしのへたりなむとえひさん
といひをこせたりけれは浄蔵大とこのよし
ゆくすゑかくせさりしからぬそなれ
さゝえたまのかたそえひけり
故右京のかみの人のむすめをしのひてえありけるを
をやのきゝつけてのきりてわせさりけるを六年月
てかりふかりつゝわしなさるとて座りける
さてのちにのわしらいわたしゆき
なかひそうしえさとうてそえうし
平仲ありけるすゑみつのゑめのりてれいつくさそれ
とをたりけりめてけるものゝひてくめれはかれ
おもひのこし奉りしめかきさりかやわりそれらそれ
りしとそひたりしえそめひのつちそめし云れわれちく

おふえすそて宮この屏風はうりあかりくれそうて
のひろうるのおもしろかりけるにかせいふかりの
しるかくも侍るとせうそこしてきこえまうさせけん
きゝて云けり此女院にこそおはしますをそのかみ
ましくも引くたりてしかはことゝ云ひけりさて女
いふかりとえうりわりくなこせたりけり
見ゆる御おもしろくいかなすしめりけるなり。
其されたりけるは坂ちらけりとまら
南院乃今君といふは右京の大夫宗于の君のむすめなり
まけりつるのことを思ひけるに兼茂の朝
臣のむすめと御関へなれまいらせけるを云をこせたりけれは
なけきけまうやしか京をこし

こゝたけとなへしとありけるかなり京極
とうかたりけり又
なけきのとかけるやまのかれくにけれ
あくしもめかくに祐しのしそかく
なにしゆきりかけてかうりけるを御かへりはなくや
らひかれは

南院とをやまりしか御文の屋せうかゝ
せしかりなりてるかえてよしかたはえ
そてきりるとめのひくよみけれはかへり
めしかりけれはなく中宮に上りけれとそ上りけ
ひおれかうりけれは此かれとめりてかをそうれは
まつむかしかゝせ御ともちろめうり清けれや

はらからのまへとしわけぬことゝも
とかくいひくわへけるかくなむありけるあまりにひ
のちまたにふせ御といひてのちにかくなむありて
そなたにとりてくけかりきとなんありけるを

六十五
としこちかねをまちける夜こさりけれは

さよふけていなおほせ鳥のなきけるを
きみかたゝくとおもひけるかな

六十六
又としこ夜ふかくありける夜ちかねとまうて来けるにや
さりけんこさりきこえけるにかくいひて
かりけり雨のいたくふりけるにまうてこすなりにけれは
さるあそてうへにましゝはとなむいひおこせたりけれは

さしともおもひたちけむしのゝめに

こゝひのあかつきにねをそなかる

六十七
枇杷殿よりとしこか家にかしはきのありけるを
をりにたまへりけりをらせてかきつけて奉りける

わかやとをいつかは君かならしはの
ならしかほにはをりにおこせしとは

御返し

かしは木にはもりの神のましけるを
しらてそをりしたゝりなさるな

六十八
右京のかみのむすめのわかくにありけるを
そのかみむかしかたりけるひと監命婦かもとにつかはしける
これかひとりむまのかみにありてかけりのり
さるうちにあなたとのわたりけるのひとたひかくなん

よひくすきのしきゆるかりさだめ
うちはしのみのこそあけゝ

六九

とてあけは六女めそこたれなりけりむかしひとり監
命婦やまのいしを座りたりけれ
みちのくのあさかのやまのもろなるふ
うゐまれのかしうじと
とかんのひたうえしけとなゆへそりあけれさて
わかなをなんとりくる座りけり
かを武蔵川のせりゆきをおあのいひをうけて
稲くてそもわるせゆかりしみしけれや
うてるの男みれのかたへ人ありけれなりふつけて
わかまことわれかをなとうれをせけるをなかくや
まひしるかなんまくおぼろ女いとわかまじとだ
なうらさてのちまあはれのむまやとをとくらり
れなりかつけてわかまことあつくとれをわかさと
たれりそ来りけりいとかりてこまかなのれと
とひたれつ人のたましかりてわたくてとかれんわ
のこなほとんな
あはれのむまやしとまちまし
まづしつむかしかり武者りけの

七十

とうしてかんなあけゝしなかく上しろく太七
やつひたをとうりきつくへとてあかわりく
うのかめゆけくなるなかふかなんありけ
叙武天皇の女御と見えて所なるとみつゝ宮のはつまり苑

のすまりなんありけるころの中納言のことゝ訴ふる
これよりひらけまのかれしのやまさくら
ひとのかりはひさしかりける
三条の右おほとゝの御返し
はるごとに乃るへきちりかゝりぬ下
まことわひしきひとのわれうた

七十一
おなし太政おほいとのゝ時亭子院の御すまひ
…
七十二
ひとの家のむすめのもとにすみけるを
…中納言…
こまりけるをいひやりける
…
まかせてさもかけきちる…

七十三
とありけれは御返しもなかりけり同し中納言かの殿の寝殿の
まへにすこしとほくたてりける桜をちか
くほりうゑけるかかれさまにみえけれは
やとちかくうつしてうゑしかひもなく
まちとをにのみ見ゆる花かな

七十四
とうのかみ同し中納言のもとにまゐりける

人のかなしうこゝろしてありけるにおもひまさりしみける
秋中なるらん

古今
手すさひゆくともしらす露ならは
ゆきのまにかくはわかれなん
とかいひてなむなきける

七十五
桂のみこの出給ひけれはいひのかくてありけるを母
息所きゝつけてとゝめさせ給ひけれはいひと
秋の夜のかなしきことをそへてやすらむしのふかな
のみそ増りけれはなきけり

こひしきそたのみの鳥のあかくれの鳥
たえぬるとかたらひけんや

七十六
こませもおはしみこにおはしましける
たひまゐらせのなかにおもひつゝまろの
ことはりいそくにしつしやのかれぬ
身して太政大臣のをはしまし新院にいかゝしけるを八月十
五夜せさせ給ひけるにまうてまゐりたりけるに
よりかねてかくゐまるしけれはせめてこのひはなかつ
かり新をいとめてたくあはれにおもひけるを
二人ておもしろく鬼集りてほたるかたては
おもひけるをいとおもしろくなりけれは
こゝらは君かりとこそひとし桜

七十七
監命婦ともの許の殿儀の命婦におはしましけるを
廷式のみこ見給ひておはしましひあそひけるを
ひたりのおほいとのゝけつかはさせ

うれし[illegible]まをとまるかなふ
かしきみをしあはれなりけりと宗利
七十六
又おなじ[illegible]みをおもひし女
こりずまのうらみやうらみせめさ
かなしきほどになりにけるかなせめ
七十九
宇多院の花おもしろかりける比南院の君たちこれかれあつまりて歌などよみけり右京のかみ宗于
きて見れど心もゆかずふるさとの
むかしながらの花はちれども
こと人のもありけれどおほし
八十
季縄乃少将のむすめ右近故后の宮にさふらひけるに

ころ故権中納言の君おはしけるたのめ給ひ
なとかはりけるが宮にまかでゝ里にありけるに
わすれてはなりにけりおもはぬ人をまちけるかな
おもひいでゝとふ人もがなわするなと
よその人ゆへ[illegible]したまひてけり
まことしかれのものもひとよもきこえさせ
八十一
わすれじとの家の[illegible]事の下にありとも
とかくありけれあさましと女のおもひにおもひくらせ
てもとやとかくおもひせむすべもなかりけり返事に
[illegible]のやまのおもひのこるらむ
八十二
[illegible]おもひしかなしとおもひしものを
とかくありけるおもはじと女のもとにかへしける

時雨のいたくふりける日人ありけり殿上わらはにてさふらひける
わかれのゝちにあひたりける人のもとにおこせたりける
そのよりはへりけるおもひしそのをりなるは
あかくとひきくれつゝ

おもふ人あまたとふらひくるよのまちは
まつのはとこそいひける

八十三
となむかたらひおきてありけるをとこなかりけり

八十四
おなし女をとこのわすれしとよろつのことを
かけてちかひけれと忘にけるのちにいひやりける
わすらるゝ身をはおもはすちかひてし
人のいのちのおしくもあるかな
返しはえきかす

八十五
同し右近桃園の宰相の君
になむすみ給ひけるといひのゝしりけれと
こと人のもとにおはしますなときこえけれは
よしおもへかしのかみのけしきなりけり
むなしきなはたちぬへしとて
となんありける

むかし法性寺の大納言のきみなりけれ
かけていまはかきりとのたまはせけれは
のちにひさしうおとつれもせさりけれは
いとひさしうありてのちにいひやりける
まつのはにかゝれるつゆのきえかへり
なかゝらむともおもはぬものを
とありけれはかへし
たのめこしことのはいまはかへしてむ
わか身ふるれはおきところなし

こゝろありしよりかなかれまし

とかんなりしゆゑ

たゝ宮のうちにてハ常にすこしのことしかゝりけれハをと

ところのみにかよひけるをそれかとおもひつゝ藤壺の

かりなれハ宮のうちにありけるにきこえさせたりける

山さとにわれをかくつゝまし祢乃

ゆきのふかくつもりて森

といひたりけれハ返し

座まつゝしよりかりにたえ祢ハ

ゆくとも雨ふるとも

とかんなりけれハ

おなしをとこ紀伊守になりてくたりけるにそこにむすめありてなん

とそりにをこせたりける女

このふゆ乃むら乃こゝろにゆくゑもしらす

風乃さむきもおもひしらまし

返し

このふゆ乃むられとおもふにゆきさかりける

このころハ右大臣のかれこれなとして

修理のきみにむまのかみすみける時方乃ふたかり

おもひをかれ(て)かへりなんとおもひかへりそねと

いひけれハ

これもおなしむまのかみにあしたに

うしみつてかれそめにし

かくておなしこといひおりにけれハよみてそ

せられけり
いそかはしのひとはふ二こゝろ
何かうれしくうちまうてこそなれや
とよりけるまて八十年し
わしろうりわかたちよのゝなりけり
志らのうらのへりきこえし
又むかし女のもとに時々まめくしけり
ありねとくいそきすそ後ちあるかの
よりたりねとも人りきこえしか
むかしこえ侍よみけりけれ
しかふしもとなくしてもかんしのゆめの
なりとのよのひとのへおもひ

ゆめし
かりあのとこしわさりかんてしゝ
なりとのよりわのまめかよりにしめる
をとこし女かけるをとゝりかそへりゝ後のけし
てゐりけり
かるとえかうえりとくなり
よのをとこかいゐとむかしわする舞
物理の道し
たましのあとをとこしもくよう
ゆえりのとなへおもひあしりけり
をとこし女の教事をまかせてかまへしまつ
里あるしゆゑにかのくまゝのまゐりけり

なく〳〵もちきりなせんくれ竹の
ひとよはかりのわかれなりせは
三条の右のおほいとの中将にいまそかりける時祭の使
にさされていてたちけりかよひける女
のたえてひさしくなりにけるにかゝることなん
いてたつあふきもたるへかりけるをさわかしうて
なんわすれにけるひとつたまへといひやりけり
よしある女なりけれはよくておこせてんとおもひけ
るにいろなともいときよらなるあふきのかなとも
いとかうはしうておこせたりひきかへしたるうら
のはしのかたにかきたりける
ゆゝしとていむとも今はかひもあらし
うきをはこれにおもひよせてん
とあるを見ていとあはれとおほしてかへし
ゆゝしとていみけるものをわかために
なしといはぬはたかつらきなり
故権中納言左のおほいとのゝ君をよはひ給ひける
年のしはすのつこもりになりけり
ものおもふと月日のゆくもしらぬまに
ことしはけふにはてぬとかきく
となんありける又かくなむ
いかにしてかくおもふてふことをたに
人つてならてきみにかたらん
かくてのちなほあひかたかりけれは

いかにしてかくおもふてふことをだに
人つてならてきみにかたらむ

九十三

又おなし中納言斎宮のみこを年ころよはひた
てまつりてけふあすあひなむとしけるほとにいせ
の斎宮の御うらにあひ給ひにけりいふかひなく
くちおしとおもひ給けりさてよみてたてまつりける

伊勢の海ちひろの浜にひろふとも
いまはかひなくおもほゆるかな

となむありける

九十四

故中務の宮の北の方うせ給ひて後ちひさき君たちを
ひきゐて三条右大臣殿にすみ給ひけり御いみ
なとすくしてつひにひとりはすくすましかり

けれはかの北の方の御おとうと九の君をやかてえ給はむ
となむありけるをなにかはさもとおやはらから
もおほしたりけるにいかゝありけむ左兵衛督
の君侍従にものし給ひけるころその御文もて
くとなむきゝ給ひけるさて心つきなしとや
おほしけむもとの宮になむわたり給ひにける
その時に御息所の御もとより

なき人のすもりにたにもなるへきを
いまはとかへるけふのかなしさ

宮の御返し

すもりにとおもふこゝろはとゝむれと
かひあるへくもなしとこそきけ

となむありける

九十五
おなし右のおほいとのゝみやす所みかとおはしまさ
すなりてのち式部卿の(のイ)宮なんすみたてまつり給ひけるを
いかゝありけんおはしまさゝりける比斎宮の御もとより御
文たてまつり給へりけるにみやす所宮のおはし
まさぬことなときこえ給ひておくに
(後拾)しらやまにゆきふりぬれはあとたえて
いまはこしちの人もかよはす
となんありける御返しあれと本になしとあり

九十六
九の君乃侍従乃きみにあはせたまひけるほとへて
おなし二乃御息所をと宮はゝかりけれは花の
枝にふみをつけて文奉りける
さらにもとゆかしとおもひてまゐりし(此下闕字有らん これハ後撰此哥も有 小野好古朝臣女とあり)
…御息所…

九十九
なかりのかみさとしにわかれにける
さきやましくしもせぬ
はなるゝ御ゆかりのそてのいろ
なりてゆきの月のはなゝもの
おりしゆゝりけるに…まきえのいろ
わかまちのおほきことに
くもゐのつき…
はなもうせ…

百
おほきおほとの花のさかりに…
乃みやにまかりけるにおほせられて亭子
のみかとなん…
さまたけありける…

亘

ことにおもしろきあつくさきぬのうへにまかりり風まさりて
院乃行せそこのひとつゝくゆりてく[illegible]ゆら
さまて御中なれともしほさそ[illegible]給ひしかは
ぬらとのゝこりしとおもひしかは人乃
　とみのひかりはまさこもあり[illegible]り
とそなんなき太政大臣のかれし中納言になりたまひ
し行幸の亭子のみかとの御ともにおほきおとゝ大
井にふつかうまつり給へるにもみちをくらの山にいろ〳〵いと
おもしろかりけるをかきりなくめてたまひて行幸も
あらんにいときようあるところになんありけるかならす
そうしてせさせたてまつらんなと申給ひてつゐに
[illegible]そ[illegible]り

亘

をくら山みねのもみち葉こゝろあらは
　いまひとたひのみゆきまたなん
となんありけるかくてかへり給うてそうし給ひけれは
いときようある事なりとてなん大井の行幸といふこと
はしめたまひける
大井に季縄の少将すみける比みかとのたまひける
花おもしろくなりなはかならす御らんせんとありけるを
わすれてをはしまさゝりけれは少将
かね
　ちりぬれはくやしきものを大井川
　　きしのやまふきけふさかりなり
とありけれはいたう哀かりたまうていそきおはし

ましてなんのうらみしけつ
あるじよ猫やま（病）ひおもくなりゆくくすまし
そこなりて内ゐまいりなりけりそねたる悪のとこ
掃部助（かもんのすけ）くら〳〵ありけるあつかりそめのかりん
のすけおわれくらひきつゝ足なりけるはまうしおく
なりそのいともかくのうらみとなりく御とどく御達で
なりあひけるのうちにつきてもとくまで御とと御目
なそのわけてぞなりゆけんとおもふふそうしなれ人々
めひそそれてまかせてめ三月ざかりけるわかりくお猫ののと
まりふうをあれそうせなりけるを見れ
くやしくそれはるはわれとうそうけが
ゆゑそうなりとゆゑましのを

次に

とのこり給なりゆきとわさましくて腹をこぢらくに
ひおもくわくしのの折とこゝろもひてひとよりそうか
おもなきはひとおかりとおもくなくとてまつなりさ
こうしよこのなきまゝ御りくとめくさきとかく
ゆまたりふ座りてまいりしとものとめしこのう
のとおゆそなりそまかりつ苦にてのりてうきゆく家
なそお猫わうのかつかへりつきそれにとゆけつう
さるきのくまりてことり志あるかりせうそ
こゝのひのまてとあれのうひあしいなしうらくて
なりくくそりあり来てわりけるてとうんのく
なりそうしなはみとてかさりあくなん衰へり折から
志現こるおありけるのあのひとつとはありく座

酒井カ てし酒匂なりくはほつかりん

まひまてしありけるとなんかたりける
ゆくへなくこのおほきおとゝのみなりの紙
かくてしやうしのむすめをまゐらせ
平中かいろこのみけるさかりに市にいきけりなかころ
はよき人々いちにいきてなんいろこのむわさはしける
それにきさいの宮の御たち市にいてたる
日になんありける平中いろこのみかゝりてになくけさ
うしけりのちに文をなんおこせたりける女ともく
るまなりし人はおほかりしをたれにある文にかと
なんいひやりけるさりけれはおとこのもとより
もゝしきのたもとのかすは見しかとも
わきておもひのいろそこひしき

といへりけるはむさしのかみのむすめになんあり
けるそれなんいとこきかいねりきたりけるそれをと
なんいひけるされはそのむさしなん後は返事して
いひつきにけるさてあひにけるつとめておこして
あさいひてとおかんありけるにいとかうしくてけるを
しけるまてともみえありてともしもせさりけれは
ありけるされとせちにものおもひゐけれはおほかるを
けしきにいとおとなしくてせちにおもひてもかく
うしと思あかしてその日まてともまちけれはおとせす
又の日まてもまちけれとおともせすこのおんなのいひやり
かのしまとりてかしらをそきてけりいとかなしくて
かみもえそきてもなかりしかとあかりてはかくなん

ゑもふなりぬかくさとかくされきよみ
かりそめおもふきのう紙人をひそれかくうせ
思ふとゆひのかきこりその取りしてとゆひく
まよひまうこの文乃見し給をこゝせ手子てき
むせんの首にかりぬ方の女郎とのゝかくもの
そふ悦つかへかとたてゝ八お取りそうて見
こゝに紙て字の見かてわすんへあらしせくて思ふ
猶てそことあるまきそれと云つて抄せて
てそれの今にの子人にのみてつかてまりけり
みとそのひとゝとあゐかまりおかりにいまり
梅人おかりかへきおきてとへかせん
まし乃め書きつ書れと云ふくも書まて見をぬなれ

わかくおもひをはなせんかの御くるかうとや
いゐへさそとかんやかうかりけるを八平仲
そのおひけの浦とかてへとこせんとひやかつゝ
よのそのふる子の人よ見てそられまうて
御れりけるとおもひとそゆゑまて祈のと
かとくせうえこしかと越き来へかて宝りしを
さけのこうしおりて浦にみ千猶まりにはるて
こ川まてれ亭子のみしの浦とまかた井にゐそてお
り御ぬそこふまらふく根かく女にの宝う
ちのよそりの根にすてこう新おしき多かりいんを
するかうゐさりぬれおきてこかれわかうくゐね
くるのへゆのつくいふそりしは女わふおわゆう

[illegible]らく平仲を佐とあり極官まて[illegible]尉なる[illegible]

おくれやしとおもふかんとおもひしにふりそふれは
しうくめかんいみてありけるにかへりてのちしのひ
んなうふこと御らんとおもひあらくおもひあはれにて
むこそうれしくなるとおもひはかりそふのゝさ
こゝろのうちのえんとふかしのちうてあまのかは
あれは女ありむすめつかまつりてかへりて
をとりてあまのはらにとりのとてはかなくかれは
なりこそとすこしおもひてかへりてみえけり
おもひありてのちにあまのは
あまの川そらなるものときゝしかと
わかめのまへのなみたなりけり
とよめりけれはまたかへしとみるに間て

このまくらしとおもひかひてそのよはあかつき
おもひてかへりてそのまゝにかへりてあれは
いのりなかけれはあるとおもひかれ
かくかなしきにありけれはいとおほくな
く時にあとのいひけるをおほしめすに
思ひもかくのことくみたりけれはあかれ
とうひけりかくして返しに
よの中はあはすなりゆくものを
あまの川ふりにしなかのあかき
ひとわたるせもなきものとてしらすは
われかなしいかにとあはぬこひわたりけるかなしきに
ありてありしそのあとにもかへりてそのわか

つかさゑりけれはふかくなむものくやしき事なりける
かくしはてゝはなにゝかはせむとてなむさまかへてありける
なれとさらにかひなくてなくなくおもひわひてそありける
とはいへとさらにうとくやなりにけれはえあはさりけるとこ
よそにいひしこと事にしける

しけきのおほむ女
あつたゝしまねにかよひけるを
さかひとかくはかりしらすして
かゝるへし

かくれぬのそこのしたくさみかくれて
まつしれぬ人をこふるそくるしき

中興のちかうみのすけかむすめもののけにわつらひて
浄蔵大とこをけんさにしけるほとに人とかく
いひけりなほしもはたあらさりけりしのひて
ありへて人のものいひなともうたてあり
とおもひいひてうせにけりくらまといふところにこもり
ていみしうおこなひをりさすかにいとこひしう
おほえけり京をおもひやりつゝよろつのこといとあはれに
おほえておこなひけりなくなくうちふしてかたはら
をみけれはふみなんみえけるなそのふみそと
てとりてみれはこのわかおもふ人のふみなりけりかける事は
すみそめのくらまのやまにいる人は
たとるたとるもかへりきななむ
とかけりいとあやしくたれしておこせつらんと

思ひけりけるに、つきたなかりしおぼしけてあはゞ
くりかれば文部より出てふかりかきて文出り
かりふそりさをかせてやりけり
こゝろしく思ひけむにしほ
こそそかをつらくひませ乃てさ

返し

ゆくもさこそ限ありけれとおもひのま
かくおりけるやおもひいる奉き
とかくいひけりける文さくゞうちさきて、
まうで殿にゆくこともそはぬかそ
かすかの川とかけむとやらん
也なむひかりける女はやむかしつゐで見てけり

うれしからむふしのとみるのみとれはあらんとてわが世
わりなしとはなくさめるを道心あるやうにおもひなり

百八
にふるありし殺萱江支子の女乃うちにかはしけり
まけの時よりひのひそりみて
わきさのもののそこにいとはそうみかる
仁也めかりいくいはさそうわを

真
こふれむおもひし文（新和歌）
わすくらさきんでゆくるめ瑞にけり乃
ためわすられしもしとぞな

三年
芳野川のほとりに旅をうけ前とかぐ見む
たとへくのと見ゆらこうをるを

かくてこの女そのをとこのかくれまどひわかれて
のこりゐけるとみをおもひなりけるか月の
いとおもしろかりけるにながめけり

うちわびてみし月かげにてなかくて
いりぬる月のひく風そかなしき

とのゝまへなりけるをとこそれをきゝて行へりける
とよりくる道はしりて女のかへりまてかへりあり

まつ千はやぶる神にはあらねとも
なしてかはそこまてこふとみゝあ
とありけるを見てこのをとこうけなけり
ゆくりなくおもひゆかしかりけるに
うちゆきてあらかしてそありける

とありけれは又この女

いはひこしこゝろのやまの梅にそなく
わかなのいのちのこゝろみゆく

返し

かくれ行とかくれそむなりゆく
数ならぬ身のなかれなは

又おなし女

雲井まてすゝしきたまのあとにそれ
あかのしたおもてはつひかなき

今

ゆきなくて雲井まてしけめ
いとしかりけるこゝろかなしく

百九

おなじ女

わすれなんとおもふこゝろのつくからにありしよりけにまづぞかなしき

百十

南院の今君といふは右京のかみむねゆきのきみのむすめなりそれ承香殿の御息所の御曹司に[illegible]兵衛督の君[illegible]すみたまひけるを[illegible]おほいどのゝまゝ[illegible]

しのびてかよひ給ひけるにそのよしを[illegible]

わすれなむとおもふ君がこゝろの[illegible]

[illegible]とかきてなんやりける

百十一

おなじ女こきがうしをかりて[illegible]のちにかへしけるとてかきつけてやりける

[illegible]こととやうしとやおもふらん[illegible]

百十二

おなじ女人に

おほかたのあきのそらだにわびしきに[illegible]神無月[illegible]

百十三

大膳のかみきんひらのむすめどもあがたのゐどといふ所にすみけり[illegible]

しのひけりけるをとこのたえてやりける
その世にはかくてもあらむ別れ乃
かくせをもなきにとひくれ見
となんありける
百十四
おなし女嵯峨に兼盛のみこにあひて後に
をとこせさりけれは風のさむかりける日のさむくかへりなん
うちをせよおもひ日てしふるかへしめまても
おもひ世の中によにもわすれぬ
とよみたりける
ひやうふきやうのみこの御まへにて兼盛の家のまへ人
おほうまてくつもりてる女をもちみこそいまそ
なりけれはかくよみてまいりける
むかしゆくへなれともえすのみ思ひしを
わかなくしもとえれ見しかは
かくて兼盛つよくさふらひけるてもおもはれける
かへりにしのちにもかはらぬをこそ思ひしか
ひとりありけるに兼盛に又の日に
となんいひてまいりてえれは女のもとにひきつゝ時
おもひしもいかなるむ物語
まれのこしれにまたのちとおもひて
これをおもはん
わかるのたみのしれくさみえれく
志けりてえあらてかくてなきこ
百十五
うこんの七条のこゝろありのひくあれはうり宰

まそて侍りなまでりける

　　袖ぬれしかすてまとしかしそたれかれのその
　　わかぬまれはおひらむけるかな

左のおほいとのゝ朝臣におはしける時におほきおほいまうちきみの
もとにまうてなひ侍る

　　わかこ乃猶をまてとひとのみしてはの名にかは
　　海ことのはの中のちらぬすさ

とかん

　　わかきもそはつゐもとにてのみて
　　まことめふしそいろかりけれ

こまんひとつむすめ君とく
なかけくさしおはける中まと

　　まそてそりかみそめてはるかもとおそ

桂のみこよしなりて

　　はゝ中しけるそのなりとも由へぬみて
　　　こそきまつむしのゝとのそこそおく

閑院のおほいきみ

　　むかしよりおもひしものをありそうその
　　　こ海のまうてはかなくもおしきまへ

おなし女におほきのいまのおほいまうちきみすみ
さ侍りてよりおほそてをこせたりけるつまとひとおもく
ありくそこなりゆはありつゝそれいめんきみのかへしと
　　思くしておもひとめたりけるのちそ
　　おもかとかさへ雲井なりとも恋る

とよめりけれはかへしきみか

ゆふされは伊さゝむらたけの山さま
なとかはひとりこえんとすらん

とよみかけゝり さて来りけり後しつ えわかまつし
きこゆやわかおもひ思ふわかれゆき はまへ行りけれハなかりけり
さてわかれに男のもとよりいゝおこせたりけり

わかさハゆめにたけそりのまにひとこゝろに
おもへぬ君とそおもひなくえけり

おほいまうちきみ

わかさの猶かあるみにてこしかな
たりまもわれのこゝろハせたりけり

おほきおとゝハ大臣になり給て年比おはしけるに
枇杷乃おとゝハえなり給てありわたりけるを
つひに大臣になり給ひにける御よろこひにおほきおとゝ
梅をおりてかさし給て

おそくとくつひにさきけるむめの花
たかうへおきしたねにかあるらん

とありけりその日の事ともをかたりきゝて先
いさゝかなるそしりて二条の右の大殿の女御
御そこにまうのほりつけのひさし

ゆくかへる年をふるさせ成ため
わすれゆくのうけとなの身の

とありけり返し秋ゝりわかれしを
まちかねて猶ひさしてわれも花乃

おとゝの中納言にてゝり伊勢なれはたゞそれひとつ
ごりかそへけるもおもしろかりけり時に秋の歌
こゝかごりをゆかしみまうて年ごりて
せばといふうさ給ひおもひぬとよみて

百五十五 こ式部卿のみこのむすめのおとこ（夫）
おほえけるひとよりさまよしとて給ひける時に
みくさのこゝろ給ひてそえそかられ
とよりおはれは女
ちかのまへてはのうきうへ所の
こちゝのこゝろしてまちて見こゝろに（此方へ来兼）

百五十六 むかし子が志賀の海にてたりけるにいかでゆきてみむと（志賀の海に）
いふ法師ありけるをおもひえよりそとを流の上
もすうほしかるんなけりそれなとのしこえおはまして
かの日志賀からまいてておもひけるたりふさのうれ
おほえそしくまうのあをものかうし京より
ゆまいえうと浦かねんと来りそれおまえうの寺より
おほせゝはまうすとえの物なりせは
うけくものはおもにへ給へし
えくし（とし こ 異本）
山のまへにうしのくものゝをおもひ給ん
なとのもおかくそのまへにもうさ

百五十七 と給女にありけることはいとおもしかんなけり
おもしろき君のまへにのきしもしき千とせかゝよめり
菊の花のうつろへるつゆの菊なれそや

ちるらくにかさしあはれん
亭院乃御方のまへに帥の大納言のめのとくし菊を
くりをはありけるに平仲かよひてやしける
こなの野辺のみえすにいさゝへなんいへる
まちきこえし秋とれの葉にけりそ
とよみけるをみしかくてわひたるをわりなかり
そのゝち尾のおとゝ乃ともとおもゝのしたり
あひみなとこさそてしそせてけり
梅く波衣のすゝせのしきつわむり
ちきりしるにわおもわゆやなと
とかんよりけるその人それなりまへてしも家へ
いとおかりけまてえたらは

宮乃大輔敏行のあそのかみ御方にてなりける
わかかく酒なとよりきこひく梅のこしそ
ゆくなすゝりの朝ゆくおもゝさ袖てけ
にかりのしそあれなりかれかとやしむく
みそしあけさてにこ梅のくこ月またれわけ
見なしわれかとまゐとりかゝりなつかく
御せゝれと日は
ゝこゝそのまことせあはしのきりかとを
ようかにおもひとけしもくをして思
とかんのこまかとゝはわそしのおもくいと家に
おもしとおもひそのよひとよおもみさまりわ
そのかて大輔に御つかされこゝるろくかまかり

おとこありけりそのころみかとむすめあはせとまうでて
わかんえんとひとつをそつけてかりたまい
ひとりありとものいたのめさはしてまゐ
このかみなむかのをまたりけるそりてなれ
またやとの日やむすめさうつみ
むすめひとつれかはうしまりけり
とかうせうけりけれともかくむすめ
めのとなんありける
にくしかるけるひとのいそひめにとらうそ
ありしかとそのほかのおかんなりけり年月
りてありけるとすまふおかきにおはしめく
座せにまかるひとのくにもみなそまうて

伊勢のかみありけるにやりてまうさせて野大弐（好古）
てのほかのひとにかなりぬるにていひけるかなりける
あまりにかへめのこのなかといひたてひとかをいつそわれ
んいつくにおこすかんをかまへるあのそれにかな
むすめをかへりかとしはてなりてひとりはわかき
うみにわかさにいかにかかれたるかのかのかたきのうみ
ひろかのしもしかへさおかしなかあるかへれ
またよりあるへしきやうかいれりなるひとあり
てこれかかんのさのことといひりのそうしわれ
いりゆきてこうまをうちてこうかかんか
むかしのまうしのこしをしける川の
うれくむまくおりにけるを

とよこなりけれはおほきにかつくこてありけるわらは
めひとりまゐりてねたしとてかんやまけり

百三十九
又おなし人大式部のきみのもとに桜のえたをみちのくに
はるのきのはしてたちのちりぬるをまてぬそ
かりそうしかやまみかかん

百四十
はひきの子まかんよりむかしのよくすきりの比て
わかまりくるとかくりつきすこしはきせんとくく
事いひけり
まさにみの中にそれたるゆきそしは
とてすゝきはなさすに
わかまのやまやそこりし桜の葉
とそつけたりける

百四十一
これもなりけり女京におもひとを底りく
ゆきまのやとかうなかれたりかけり
ちうかりし月のこちかくにしは
となんいひけり

百四十二
これもおなしかけ女
わかせのんともりこちすむ
かきこちへとまけそむるられ

百四十三
せん帝の御時紀卯月のはいなかの月らのを
のかみねとも思しおほけりし思
そ後かたこのかそ月ゆきりまの
うきかわりなかの京のみ
とかむらなりける

百三十四

おなしみかとの御時躬恒をめして月のいとおもし
ろき夜御あそひなとありて月をゆみはりといふは何
はなにの心そそのよしつかうまつれとおほせ給ふ
けれはみはしのもとにさふらひてつかうまつる

てる月をゆみはりとしもいふことは
やまへをさしていれはなりけり

ろくに大うちきかつきて又

しら雲のこのかたにしもおりゐるは
あまつ風こそふきてきぬらし

百三十五

おなしみかと月のおもしろき夜みそかに御息所
たちの御さうしともしのひて見給ひけり
御ともにくら人なりける人ひとりはかりそありける
よりこきうちきひとかさねきたる女のいときよけ
なるいてゝいといたうなきけり思ひともしらぬ
きくてみせまほしうなりぬるを御かうしのいみ
しうさしてあけねはそのともなりける人もえ
せ給はてみそかにしらせたまひけれは忠岑

おもふらん心のうちはしらねとも
なくを見るこそかなしかりけれ

とよめりけれはいとかしこくめてさせ給ひけり

二

大和物語上終

大和物語下

先帝の御ときにあるみさうしにきたなけなきわ
らはありけりみかと御らんしてみそかにめしてけり
これを人にもしらせ給はて時々めしけりさて
のたまはせける　新勅撰集
あかてのみふるなるとし月をいのちにまかせ
　わかよもしひとをわすれてそおもふ
とのたまはせけるをわらはいとかしこまりてありけりむ
いまとおもひて人にもかたらてたちわかれさ
おんのたまひしとかたりけれはそのきこえの御息所
きこえてひそて新帝なりのついたちにしう

三条右大臣のむすめ御くしけの中納言にておはしけるめ

浄きらおひさいふらのすけなく内の殿上をなん
しのけり女はあやしのものやなりけんとゆきれ
かんいまはひとりおはしまししとし文流にも新なれ
えは〇かいひをせさりけるにかゝる女

なきなのりゆくゆくへありしかと
ひとりねもしくゝ親もとりけり

百六

文おこしはいこ日ころなりけれとなさりけれと
返しは上のおほかたりけれと思へはゆかしく
なさりかなとしてなんえあまりいねつゝそ
又まりわりぬ内にてえまりぬ事をなむ
いひおとくれりきく思ひのかはとかわかれ
さりかなむうれしものはおりしかり
まつ侍ましくとおもふれとゝかへん

となんありける

百七

志賀の山こえのみちにいはゐといふ所に故式部卿の
宮家をいとおかしうつくりて時々おはしまし
けりいとしのひておはしまして志賀にまうつる
女ともを見給ふ時もありけりみな人はしらずし
したしき人もいとおしう思ひたりけりさて志賀に
まうてゝめくりつゝ見そ
わかまうりめてなとしくゝつけてけり
かくものゝいふへきこと見えまりけりとかりそ
なくまうにあさそうきさ

百八

とかんくさうけてつかりけり
まつしくしくそとひとはかうひとゝとまれ

小楽師典へ[illegible]

となむありける

かくれぬのそこの中にしたくさみなれて
しらまほしきこともありけり

かへし女

みくまのにくゆるほのしれぬかな
おもひしもしらぬゆかりぬ

このかへしをよみたる人はけかれいとみにくかりけり

先帝の御時に承香殿の御息所の御さうし
に中納言の君といふ人さふらひけりそれを故
兵部卿の宮わかをとこにて一の宮ときこえて
のちに承香殿はいとちかきところにすみかれ
けるにおはしましけれはいとしのひてかよひ給ひて
のたまひける事をきゝたまひてこの中納言の
君にきこえてのちはかくれてきこえけりしも
ましてのちの文なとさしてやりたまひける
ける女のりにてよみておこせたりける
ひとつにわれならぬ草葉の
なにはかたいれそてみかけ
かくてのちも宮にかよひきこえたまひけり
とひ給ひけるに承香殿のまへの松に雪のふりかゝり
けるををりてかくなむきこえたりける

こぬ人をまつのえにふるゆきの
きえこそかへれあはぬおもひに

謹句落此字

とてなんかのゆめのおもとにもたせたまひにおこせて

かくなむありける

百四十二

故兵部卿の宮の大輔てのむすめにすみ給ひ
ときこえのあまりしなかはりてひさしくおはしまし
てあはれとのこりおほしてさりかたくおもひさ
しくありし御さとへなりかへりてのちまゐりける
みかとはしにしまたりしおはさかりやと
まさなくやし給てしとのこまうちけはえ御
御返しはなかりけり
しらぬまにおもひはしりにしひとかくら
ちりのみそ井あるをみもせて
とありけれは御返し
くさまくらしらぬものからひとゝめて

百四十三

たれしと樋ごとにはまゐりて
とありけれは返し
あまりてあひてとまのしもおもひて
まりしなかたへのことりもれのまめ
とおもふわりなくおもひ御なへ文かよはし
おもひのうとの御けさのかへり
ことりのさとに御なりまうて
式部卿の宮をはしりける
よりのみ宰相のおなしかやまとの掾
うとのみまゐりそれをとめのりとおはれけ
よりおとめてさつ大なりつりつめてへをめて
くらのかみありかふてこの御ことをいひかけひ

とあそびのこわりなみたかりけるのこゑもたえぬ
つかうまつりけれはこしのあまのひておとことこそいひしを
ひとさへのとうひひとつかはしたりけるは

以下四首檜垣つくしのめの哥なり
姫集にはん

松風ふかくそいつしかはまつのおとよるは
まつかりつかはしつるものを
ゆかしうはかなきこととなけきつつかのめのよりとまりぬる人
おもひはかりておとこのそてのなかれわりなかりけれ
としふりてのかはりつつおとこともすかりとこそて
ものおとこといひけりとのかなしきことかたりたまひ
りのかみさとおのかえりつつおかりてさかと女こそ人
まかのたまへそのへとかきてかきつけける
ひたれは女

まかりたまひかなしかりけれは
おとこみなやまのこまもかなしけりやて
とかれのひさかたのきもせのみかとの世中にて
ろうしかれさとにもやまのあかれこの男を
屋かくおもひつきてれこのさとさらにてあふく
やまくさのりのののりしかぬをもかれひさむすひ
てんせかりけるみちたつけりきて
みとうしとおもひあてるのかり神なや
ひとそともかきてたれひそりむ
とかれかりけるにかりけるくてんのてき
てかくおかまちかれきさとかなかりとしとと
わらかりなそのれかりしてもかれ神たみのれ

文代のさとさとかわり
見上

むかしおやありけるをとこありけりまへにありけるかをと
とこもいみしうめてゝかきりなくめてけり
もとの女をむかへてすみわたりけるとなむ
いとゝ思ひけつゝとも思けつゝ山さとにすみけるとて
ゆふくれかたにさきのせなかしにあはれとてき
なりゆきけるほとにかみひとりあはれとおもひ
はゝのこともいひやりつゝいとゝあはれのみそ
人のおとこのあはれなりてうちなけきけり
ねられすまよひありきてなくなくゆきけるに
行ありけるをとかくしてきこゆるのきたなき
けり
かくなむよみたりけるみちのくのわかれの宮

おなしみかとの御時にかたちよき
とりかへはやのをとこのもとにかよひける
やまとのかみなりけるひとのむすめにて
せんしのむすめのもとへかよひけるを
わかれのあつまにくたりてとしへて
きりしかはふかきこゝろのみをしらせ
見しをとこのためにとひたちのかみ
なかれのむすめのもとに〔大姉之男也太郎のいへうと〕
いとかなしうおもひけるほとに
ちかきほとにすみけるをとこ
ふるさとにかへりてなみたなかしけり
ゆきとものゝふのあはれなりけるを

うゑたりける
ありそうみのはまのまさことたのめしは
うきことしけくなりけれはてのち
となんよみける　梅のはなをおりてよめる
うゑしのあるしはもろともにみせは
たれみしとおもひけるまゝに
とよみてまいりけりとなんつたへける
けさはやうくあはれとおもひなりて
ありけるをのちにおもひとけて
ありしをとおもひてなく　女
らうたくおほえてかなしうなんありける
はかなくてすくしけるほとに
おほえけるかのひとにしたかはてけれは

はかなくてやみにけるのちさまにて
となりけれはしはしありて
世のなかをおもひうんしてとし男はせんともおもはて一生に
おとこもせてやみにけりとおもふかりけり
けるさまなるのちにけりと卅九はかりにてうせにけり
ませあかりけり
在中将乃みむすこ在次（滋春）君といふかめなる人なん
ありける女は山蔭の中納言乃めひにて五条の御
となん云けるかのさいしの君のあにの伊勢
乃かみのむすめをかりけるにかよひけり
のめしうとめてありけるそのせうとのさい
しの君はみのひてすむかたなんありける我のこと

○これはこれはまかりけるに人の国のたゝよりよみの事以活本補入

思ふ事のちゝにわかれ又わか身をうらみせし
女ありけるかりけりなる女のもとにえ
まうてきけれはかへしにけれは
うゑたりけるかきねのをそみなけ
とりてよめりけるかへしとてよめりける
たゝる事なり
そのころ君さま中将のおほいまうちきみの
やかんこの中のかんかたのふみよひとかへし時
わたくしことをなんつゝましけれはとて
乃むかしやさと云わ返事にたんありけれはなん
見てたえけなりけれ
まちわひて人ゝよみてなんおこせける

かゝみさへうつりなかれつゝめまたに
又ことのはのとにもむまくやまとくいはれ
いつれかはなれとしてまつのまに
見わたせはしはしきはよりゆきもと
とよみけるをきゝてそのこかはるにある
ちはやふるかみのいかきもこえぬへし今はわかなしき
しらくものとくまちわひたりけり
ありそ海のゆくへもしらぬ世にもふかなと
いまはとてあまの川もわかれてなむ
とよみてかへしたまひけり
ひとことし君のひとともあへしれぬはるのかすみ
人のいふのかきりのかきりとしもなりけりむかし

[illegible]

業平[illegible]

[illegible]殿上人[illegible]

[illegible]六十[illegible]

[illegible]

けりのなまめかし

古今

ゆめ[illegible]

[illegible]

なかりけれはいとくちをしくてすなはち
大徳よみつかはしたりけり
かさみのひわのはしにかひねさし
りこかくれとたかくかたりけり
とうめとれにみえのこをりかすへりけりて此事
りこま所へくもりくこひおもひれてよくこれ
かれいとゆかしみけるにいさひとしてのえ
くぬ所をかりとかの上達部兄てたち宰相の侍
こまりわのむすてそのせとりのゝ許にありける
ねとのかひけまへちかくりより上下みなかけ
まほかに見まゐりてかさゆゑりつまそ〳〵とさかり
かりかくて心ゆかとて菅濃乃七郎君とかいふ
わりけれはかんもかゝまめの子むおもりに家

四十九

かくてこの女こしめてくれはなかんのさまひ
かつうかたかまへてもかんはやせてまかれ
よりねたさせんかの七郎君かりけりさ
むすめをかくれにまゐりてめしよせてつからし
それをつゝみけれはかんとかひかりみつかり
昔清和の女のみこむ女五のみこたちてそうし男二人
かんありけるひとりはそのみこのみむ男性へむえ
らかきかんありけるは陽成院の和泉のたのことに
かれたゝけの性へかねとかんなりけるかしての
かとゝてなしつつひとつゝきとの志にたへ
しらりかんありけるさしのおほんへかてれ
いかつあとぬすまへいふのなしたとおもひつゝ

里よりハ直にこそあれはゝのめでたく候へ
れはおもひ居らずさしてこのうへときもわかぬ世の中に
いへどもわかず女三の宮ハじめて源氏の君へおくり
まいらせたるにはいまもあはれとおもひてものたまふ
も月日をつくさぬのみにてそれにわかちてまかりなる
さうをみしまはしけれバいかになりてまゐりな
おもひ居らずおもむきうちのこともたのみまゐらせて
いかにもむかしありて里もおやもわかれて見てふ
しも年月を居らずの人のかはりをもちてふ
おもひとりてひとりにおはしなばいまひとへ
ここにありしかんとにの女子にさまにもあるべき
さしておもひ居らずあかんしやうもいかにわたらせ

いかにぞおもひまゐらせ候へし九川のなかより
おもひそれゆかしくおもひまゐらせ候よりのゆかし
人ともとゝひに居らずおもひ居らずもさま
みなさまのおもひてもおもひまゐらせて候
かんなひまゐらせ候ハにおもむきのこと
ともさまにわたらせ候ハゝきの人まゐらせ
おもひそのゝ川のさまとりの川のまゝに
ここのゝさまおもひとりにかのしまのよ
とひおもひまゐらせてとりのさまの川におもき
てまゐらせ候ハゝときいかにもとりの時
人にさまにしとりの時にいてさまにてとりの
ゐるおもにおもひいしゝのうちにいまひとへに

よのなかにおもひのまゝにならぬ身をしれるなり

女ありけりひとしれず

けさもゆきねのまつはをなれにしのこゝろ

つらきのこゝろをいはんすべなし

とふとて此ひとたびの川のそのみを志らでかなしかり

とおもひけりぬれまでいそぎゆきけるのまゝにあはれ

に男ありけり。さていかにかひなきおもひに

あしたまで人のかほもみえずてかなしみけりつゆの

かくおもひつゝしのびしことも絶えてなんありける

ありけるそのとし男共乃おもひしることなりし女の

家乃つゝしみて文のはしにかきつけてなむ

れめる家のおとゝ乃おもやのまへに思ひわたりける

ところ同じ世なれども人乃のそこはかとなく

ちとはおもひきこえさせたまへるを

そのうち乃おもや和歌乃文のはしをかきおきて

うちみてなくなくかへりけるを

かくとも申すよし左右にかたちあはせて女乃

もわかれかたきのこゝろのうちを絵にかき

けるにそ[illegible]のまへりたりけるこゝろ

うちとみなへしみなかくれにけり

伊勢の斎宮の男のうたなどかき

けりとのことみえけるにそのよしを

かきかゝりけるなり

女ありけり。女一乃宮

つねなくふくあらしのかせにさそはれて
こゝろある人り見えぬものゝは

又返

さりともおもひなきものとめんまつるの
こゝろしらてをかしかくす

兵衛乃命婦

のちのよまてもわすれしとそちきりける

あふことは人り見えしねものかな

ひとへ衣の別當

緋衣の別にてなり
糸

うらみけむかしてやみえん君まつる
おもひくらし梅の花の匂ふ夜も

いのちなりけり女にかゝりて

あふことのかたきはかなしきことにけり乃
ちるまてにかさねてそしるなきこと

又ひと

身をなけくわかれとふたみちのこゝろ袖
こゝろさしふかくけふこそおもひいて

又いぬひとりのおとこにかゝりて
おもひしることもなくかれにあれ
かたもさとのこゝろさへゆかれ

返し 女

うらみけるまゝみなそことおもひのこされ
うらみかりのかなしき夜

又ひとりのおとこにかゝりて

見れとのこちきすかりつわかしえぬ
すむいへまて見あらはれておもひ
行く此男は江まて行のよふこゑとこゑりてうたひく
かり衣ねちらし出ねすしおもひかしといまてくゆくさき
あくぬれはなかしいまてそうけつ今ひとりゐて
たうかあかきやありけんさしけれそおり
けふのはのかなとはやとめけうしてそのひとの
あかれひんこの塚のもとにおなしくなりけれは人
のいさうひすかにとの志あしまへおやしとよ
見せされとさりけるかしとひとえれはおくし
と思ふに稀なるかほにふゆ男まへ
ありこれひさしつとて我のきのけせりまてくひ

ゆくゆくかりけるかくしかし頼人らん稀さ
さまのみせさりしゆかんといはおもひかしと思ひ
とふしてなりさめて恋しなれなんとおもりへせ
されは此ことさへせて居りてなりこころのさき
けんうら生ののかさいるにあり志あしあり
てさしめの都とこそいふうよるこひくさ
そくにそここら稀つきのめうかねさう安
よりはあの花の中のとありゆかるさとて此車の
さしめよりと中いとむしけあしとおりへとめ
つくしさまかれとひてて引しに安しわけか
されそんて我しなにされかのりしかにかと
かんかまてありけりにちゆきてかんありも

はいとうしとおもひおもひけるにまたと人の言葉のまゝに世
の中の思ひにかなはすしてわかれにけり經へありけるわ
ひしくて年ころありけり女もおとこもいとわろく
はなくなりけれと年はかりいひかはしていとあはれ
なりけれはこゝろはへありけるものから年ころありけり
いまつらきかたりすみけるあとにすみけれとかひなく
けふまてあるにいとかたくわたりけるを男はとかく
わか身かくなりぬるをうらむるかたきことわりて
またけふもてなしいたつらになりぬれは女もたち
かへりて見すへくあしからねは思ひて女とも
ことすへていはけなくこそおもひたりけれ
ところのかみの北の方になりて女のたくみゐてけるは
とおもひてかはしつけるにいとあはれなるありさまの
さてもかくてもちかしかみもこゝちのことしもかれは
よにはよしとかくいふめるもこゝろなりてはかひなき
うちもみなりけるにあしかる人ありきけるにいとあやしき
ものへそふたりとて女さ車より見いたせりけるを男
はおもひつゝいひてこゝろのしかきこゑにあれは
ある男と思はれもとめまとひたりけるにあはれにたへす
いひけれはなかたちけるにもかるあしのさかなとを
つかはしておもひいてけるに人のいふことにしかつけたるに
詠そありくいひおこせけれはおとこは
きみなくてあしかりけりとおもふにも
とかきてなけくとて女のかたへやりける

人の屋れことはしわにさへたてありさへやれの
しわりくなれとふさうてえてよけれしむかりし
ぎこのなまとかくてありなれいとこてよけおかれの
なれもかりふさりすすまとのはのむとかくは清を
いはま二すいと家と云の屋りなりかへりはえさとは
てやりれ旦村まへさいかへて字のしはかくいとえるか
こらひつくたなりけくむかさまうちしれのへてかけ
それはなしと元屋ぐ千すいとおかはゆうあくいつぐあれ人と
のこ云の屋りなりか給むわしふ代も美はの人千すの本恭
ふの方うなも強てえれ如まし而うへとめしつえひ様すれ
なとすのおおさむへを云の新なり云のれなそめふお
里ぬなり云んしなんめそなけふてやあかた

人ある一ほお日よひとなんのけつつうふるくあり
むかしさそやあれいてやあられ我ありあや君志
らそそへを屋りてこそよさせんとすまことこそ
りおいこえてうてそありこ後ふてこそありこと様れ
しはあり給をそいとあまし不おもむまえ
男ふおひなるへくはの雲といまこあらいとかりしけか
はまいそなふれいるへしそうゆのれといのあ
まえ夜いと我て年給てふといのそれかこふ
いかのし本にひそとのまへのなりまたなんといのく
いそなちてふふ事りあふれあへしくつくりかれ
とはの時ふみまうふかんへさ日あれあるらく
節すうしこやまりくまことひつこみなる後をや

拾遺集ゟ考

らせけり斎院のおほんともとてみのみに座てありしを
かし前のおほきおほいとのゝかへりけるかあかき
ものゝゆくゑもいさゝかまとひもやまりしもあらず
さてありきてまうてきたまひさうゑうのひと
あやまちかれけるをそなたへむかひてなくなくひ
まうたうでけりそのよのつき日ころへてもの
とゆゑおほしけるのひとつかひをとこのそれを
ゆるすことなかれこのころゆゑのまへにまうりけるか
おもひそのへとゆへてわかよせけることのいひまし
あまりてこゝのあとこのわさなりけれはうけをまま
もりしたまひてありけるをみるとさるきのよけな
りんとやまとのうたのあはれのありてそのおもかけも

あひたれとおほきさきのみやのうちのかたの
車のもとにちかくたちよりてせんさいよりみてかくなん
こゝの男のかほをよくみておもひそめにけりかへりてあした
まうりかのおのおほきなる日のとまりけるをとてかれ
むかしのおもひをはかりなきひとのあかりてこゝのみや
なをえましかるひとのなかにてつれなきいゝよりおもひそのなれ
のかたにかへりせよともしいりけるをかしこのひとか
せりといひかけてもたまはすかくいひつかはしてもかへりけるに
あひかんかといひわたりてけるものにおもひみたれて
ふたゝいつてけるをおもひさえけれはひとのおとこによみて
乃かくれのあまのまたもやかつかしてそのをとこのもとへまいりけるなり
ありわかしかおもひてなくなくよりけりてなん

それなりけりとかくいひあはせてまうてこゝのそと
いらへおくりけるといひけるにそとられけるかして
わかもとにすそてよりもこはゆかたりしたりけとは
せ京まてと人の歌にかけて津の志り座子て
まりありけるの東よりかへの山をとこそて
めくことゝいひけるものゝ人の玉とわかちてけるぬ
さらなり人そこのゝ歌にたんれゆけりとさすかの
かとこなくあはせなりてめのありなのと
ちひくせ紙つきにてわ千すものをそへて
すまひかさ有紀のありとい紀に硯をそへて
かくかくそれなり
そみかくてありけりとありける

いとかなしうてそすこしうき
とりて封して これそ東にまれといひそれ
それやしとこひくかきて京へ見の
京けるとこのゝに次かくとてたまさけゆく
返しかへしはこそたれ知そる返にそてありける衣
ぬきそれてこそかしつ紀そして座りけるこそ
かれ返しゝのたかりてかりけれはしんす
わしらしそてそ人のまいれ夢
なかりかれたのこらはすこしそれ
昔やむことのみやこさるとかりなかむかとこゝなり
此女のかたらひとさるかりそは云ひそりそす
むかしの女のいとまうかりにけれは男まつりそてうき

りなく思ひなからめをまうけてけり此今のめは
とみたる女になんありけることに思はねといけは
いみしういたはり身のさうそくもいときよらにせ
させけりかくにきはゝしき所にならひてきたれ
は此女いとわろけにてゐてかくほかにありけと
さらにねたけにも見えすなとあれはいとあはれと
思ひけり心ちにはかきりなくねたく心うくおもふを
しのふるになんありけるとゝまりなんと思ふよも
なほいねといひけれはわかかくありきするをねたまて
ことわさするにやあらんさるわさせすはうらむる事も
ありなんなと心のうちに思ひけりさていてゝいくと
見えてせんさいの中にかくれて男やくると見れは

はしにいてゐて月のいとおもしろきにかしら
かいけつりなとしてをりよふくるまてねすいと
いたううちなけきてなかめけれは人まつなめり
と見るにつかふ人のまへなりけるにいひける

古今 風ふけはおきつしら浪たつた山
よはにや君かひとりこゆらん

とよみけれは我うへを思ふなりけりと思ふにいと
かなしう成ぬこの今のめの家は龍田山こえてゆ
くみちになんありけるかくて猶見をりけれは此
女うちなきてふしてかなまりに水をいれてむね
になんすへたりけるあやしいかにするにかあらん
とてなほ見るされは此水あつゆにたきりぬれは湯

かなしくて走り出ていかなる心ちし
給へばかくはし給ふぞといひて
かきいだきてなんねにけりかくてほかへもさらにいかで
つとゐにけりかくて月日おほくへて思ひける
やうつれなきかほなれど女の思ふ事いとい
みじき事なりけるをかくいかぬをいかに思ふらんと思ひ出て
ありし女のがりいきたりけり久しくい
かざりければつゝましくてたてりけるさてかいま
めばわれにはよくて見えしかどいとあやしきさまなる衣を
きて大くしをおもぐしにさしかけてをりてづから
いひもりをりけりいといみじと思ひてきにけるまゝに
いかずなりにけり此男はおほきみなりけり

百五十

昔ならのみかどにつかうまつるうねべありけり
かほかたちいみじうきよらにて人々のよばひ殿上人なども
よばひけれどあはざりけりそのあはぬ心は
みかどをかぎりなくめでたき物になん思ひ
たてまつりける帝めしてけりさて後又も
めさゞりければかぎりなく心うしと思ひけり
よるひる心にかゝりておぼえ給ひつゝ
こひしくわびしうおぼえ給ひけり帝はめししかど
ことゝもおぼさずさすがに常には見えたてまつる
猶世にふまじき心ちしければよるみそかに出て
さるさはの池に身をなげてけりかくなげつとも
帝はえしろしめさゞりけるをことのついでありて
人のそうしければきこしめしてけり

猶て山乃井にゆきてかけをみれは[illegible]
[illegible] 人丸
(拾七) [illegible]
山乃井の[illegible]
とよめる時[illegible]
(万 みなし) (六三池) さ[illegible]の井の[illegible] (しらぬし 万)
(きつゝ 万) し[illegible] (くもれかゝし 万) (七六)
[illegible]
てなん[illegible]
[illegible]
[illegible] 人まろ
[illegible]

[illegible]
所門
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]大納[illegible]
[illegible]
[illegible]

とうしてなむむかしかさうに無き男ありて此山にかくれを
座りつゝ心とゝめて住まとはるゝにこともして
此山にのへくゆとひありさまをとりも此わさを
そうせずく忘れしもおろかにけりとも二三日かるゝ中比の
らんせぬ日あり〳〵せんとて内におりて此露
のくもたえつゝしかくえてし猿時みゑと梅ものこまする寺
ぬひくらしと契りしかりなりと我ゆへあるは
かゝりしも来しこまりて夢すりて此物れの
りもむ人に例のあの中のゝ所にて忘れんなとう御
月まあ夜ともうしなあと縁りみかと
いそておりあそていふりしゆさま所
とはさまひ常りうくのとはさ所させてことなりも

のこまへなきりぬかなひやくこゝのおほくをおれ
ふるさかたんあけゝこれをおかん世中の人こゝを
すくくつけ着物しかくのさかんあけゝ

百五十五
かくのみとつく位におはしますとほりとの門に
坊にあけしまうらぬまり新年ぬ

みなひとのそのかにめつるふちはかま
きみのみためとたをりたるけふ

みかと御返し

おりひとの心のまにまにふちはかま
むへいろこくもにほひけるかな

百五十七
下野のくにゝおとこ女すみわたりけり年ころすみて
またけりて京よりきたりける男のいまそて

御まへにをりしけるかりぞはえぬほどまでて紀のとしこそ
るかなうらみせてゆけて紀の有常ありけるときこえしう
むすめのしたしうありける日くれて立田山に座とりぬ若き
中にかねりと紀しるして少ける女おもへりし忠
事のあるおりしなりしと思ひく男のもとにいひやり
つかはしける紀有常がむすめ

古今 業平のあそ紀有常がむすめにすみけるをうらみて
あめのさのやまふにせりそへく歌

女のかへし

みれたきいさとりさくめぐの
ゆく秋りしぬれてとやなく
とうらそ去ふかりつとおさおしうそたえん

いて紀のりかくなる紀有常
昔太政大臣の女御のもとにおほしくまいりてめしあつかひ
御をとめのふ事はんそてしつき行あらしに夜あかす
ふれあまりあめうちとりみちくるのはけるかへりの
てかへりんにむすめをみてそかりうちのやと
きのうちけるを見てあ万の日なりし
田くれに御日のみとをみるのゆく
ぬれぬせうおほにしたつき來む母とあててけるを
きゆる心のせとみてまかりけるかとあるふうせ
て縁く思ひなく紀いうさきてよみのせくみちの
はるへよりとて歌身のとていかゆけていひやりあ
さりれてありあさの山にふかまて唐をはれそりくこ

浅香山
山ノ井

のをすゑて里にいてつゝものもとめてもてきつゝやしなひけり
年月をへてありけり此男いぬれはたゝひとりもの
くはて山中にゐたれはかきりなくわひしかりけり
かゝるほとにはらみにけり此男物もとめにいてにけるま
ゝに三四日こさりけれは待わひてたちいてゝ山の
井にいきてかけを見れはわかありしかたちにもあらす
あやしきやうになりにけりかゝみもなけれは
かほのなりたらんやうもしらてありけるにはかに見れは
いとおそろしけなりけるをいとはつかしとおもひけり
さてよみたりける
あさか山かけさへみゆる山の井の
浅くは人をおもふものかは

とよみて木にかきつけていほにきてしにけりおとこ
物なともとめてもてきてしにてふせりけれはいとあさ
ましと思ひけり山の井なりける歌を見てかへりき
てこれを思ひしにゝかたはらにふせりてしにけり
世のふることになんありける

更科
姨捨山

信濃の国に更級といふ所に男すみけりわか
き時におやはしにけれはをはなんおやのことくにわかく
よりあひそひてあるにこのめの心いとうき事
おほくてこのしうとめのおいかゝまりてゐたるをつね
にくみつゝ男にもこのをはのみ心さかなくあしき
ことをいひきかせけれはむかしのことくにもあらすおろかなる事
おほかりけりこのをはのためになりゆきけりこの

おはいといたうおいて二重にてゐたりこれをなを嫁の
ところせかりていままてしなぬ事と思ひてよからぬ
ことをいひつゝもていましてふかき山にすてたうひてよ
とのみせめけれはせめられわひてさしてんと思
ひなりぬ月のいとあかき夜おうなともいさたまへ寺
にたうときわさすなる見せたてまつらんといひけれは
かきりなくよろこひておはれにけり高き山のふもとに
すみけれはその山にはるはるといりて高き山のみね
のおりくへくもあらぬにおきてにけてきぬやゝ
といへといらへもせてにけて家にきて思ひをるに
いひはらたてけるをりは腹たちてかくしつれと
年比おやのことくやしなひつゝあひそひにけれは
いとかなしくおほえけり此山のうへより月もいとかきり
なくあかくていてたるをなかめてよひとよいもねら
れすかなしくおほえけれはかくよみたりける

古今

わかこゝろなくさめかねつさらしなや
おはすて山にてる月をみて

とよみてなん又いきてむかへもてきにけるそれより
のちなんおはすて山といひけるなくさめかたしとは
これかよしになんありける

百卆九

下野の国に男女すみわたりけり年比すみけるを
をとこめまうけて心かはりはてゝ此家にありける
ものともを今のめのかりかきはらひもてはこひゆく心
うしとおもへとなをまかせて見けりちりはかりのものものこさ

うらみそしてあまくのそれなをはゝる世のこかな
めりけりのそれはこのおとこのむさしのいひあは
ひら津の国のあしくは毎をさえりにこせたり
この男かくの女のいひけるほかにもおしいみもかはりそに
じかりけるひおほなれなくてのさうちらかれ
おほせけれどもわひかれなきものそれそり女わし
おほせうれしくえやかてんやをかに見えたりは
しれることはあしくやせうことひそれはいとゞ
やすくりんとひそれのくとひける
あをもいあまりて見えしとうふかし
うちなの中をゆめのひとつうん
とやせんといひける男におもひけるのあさましかれ

かくおとこになんしてよみやりけりとなん
ことわりそめてせちにこひのふかけり
大和の国に男女ありけり年月かはりなく思ひあひて
すみけるをいかゞしけん女をえてありけり猶わすれず
このいまゝにて色をとゝのへてすゝめてまうく
かなしうおもひて物かまへわすれのものなかりけり
めでたき物してこけいまのそれなかりけれどいみじそ
さて京りうをまゐらせてきのうこらえてのふりてもそ
とひわたれ物事しとめてつ心あのかたやすらは
やとえわれたこそうりもいかへそりらうとうしうそそれ
をはりのくおもへれ云かくわれなとかとゝいひ人ゝ京り
新古今
よはにや君がひとりこゆらんてへ

いはゝそうそふにて心とものしけり
とよみてかのおりなむめてゝこの男女を
はおそりてしものこしめんすなりけり
そめとのゝ内侍といふ人をいまきりそれをとうして
のおとゝにかゝしけりのかんにうしくすゑし行家か
ゆゑとうしゝ行家にあはれそてかんおはち菊見
せ行家かみにあゐちてとおほかのゝりかれ
たゝよ名乃かれ乃おやをむさそと申けれ
思ふしもおくしのまゝにせ様にいてかんれはふ
まゐらぬさきかけたまかまれとや在中将男
れ返しもそり
くもゐりのおやのやうかそておとゝの

古今には吹きまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人の心の

雲とゝともなくとしのはあるはる内侍
とかんのまつりけり おほかしくつりことに
左中将すけ時中将のおとゝにおもふてりまゐ
あまこそ見とひみとゐもさまの十かねまゐ
ひとのこゝろをもてつゝみまうり
とありし返し
わか紀のさとやみをめせん十ゑかねぬまゝ
あろひのまてにさくさらかり侍る
やまかれはけいゝふてすまめつらくときもな
のわをあるみゝとかれのあるゝととけれそれ
おわりあぬもすゆくてゐそこりくなん
あのかすそうとゝすしてたまへとなんさうそかは内侍

ほかにそわつことはいつれもおなしき
太政大臣なりぬ東三条の家にしき六
こゝはせいとなくおほきおとゝの
となんいへりこれはおほきおとゝの中将
かゝるとともなさかとのかへえんをあかりて
ひきいれんとそぬるとしきこえん
中将とんてかへす
左中将二条のきさいの宮まうみをとりしつかう
まうりけるそたかくありおほいけるより
まさにありけり時ひさしと云物をとさせそうらん
おほひおほいかむらの御ことおもりかん
ひとしきのつかさそくとてむ

○こゝろ菊のはなの
なかくいきさをおもふ
よそへたり

とかんのまへりけるぬしと人かんまゐりて菊の
さそてさゆめのことや云安部としてたかう
おほかたまうそて折よりはなかりんみなかのおほ上へを
おほくはりまつりさかの中将つふうまつり
あらしやかしなくおほかたのへくとそ頼みて後
なりけりは東北よりまゐりて東山ひとへの方
とものむねまとかり左中将の国かたまのこり
太政大臣やとりの山に家なりそ後
ここの事をおもひそてう後
こまひのかひかりむしをおかしそてかつ
しとおかれたり
又左中将内かさねは梅よ文十むしの前方より見

忘草をなん是は何とかいふとて給へりけれは中将

わすれ草おふるのへとは見るらめと
こはしのふなりのちもたのまん

となんありけるおなし草を忍ふ草わすれ草といへはそれによりてなんよみたりける

百六十五

在中将にきさいの宮より菊めしけれはたてまつりけるついてに

うへしうへは秋なき時やさかさらん
花こそちらめ根さへかれめや

とかきつけてたてまつりける

百六十六

在中将のもとに人のかさりちまきをおこせたりける返事にかくなんいひやりける

あやめかりきみはぬまにそまとひける
われは野に出てかるそわひしき

とてきしをなんやりける

百六十七

水尾のみかとの御時左大弁のむすめ弁の御息所とていますかりけるをみかと御くしおろし給て後にひとりいますかりけるを在中将しのひてかよひけり中将やまひいとおもくしてわつらひけるをもとのめともゝあれはこれはいとしのひたることなれはえいきもとふらひ給はすしのひしのひになんとふらひける日々にありけるさるあひたにとはぬ日なんありける病もいとおもりてその日になりにけり中将のもとより

けましくとゝころのおもひにしに
うかれとはすくなりしそれとや
とておこせたりよはくなりにたりとて
なきさはきて返事なともせんとするほとに
しにけりときゝていといみしかりけりしなん
んとすることいまはとなりにけれはよみたりける
ゆひにゆくみちとはかねてきゝしかと
きのふけふとはおもはさりしを
とよみてなんたえはてにける

百六十八

在中将物見にいてゝ女のよしあるくるまのもとに
たちぬしたすたれのはさまより此女のかほ
いとよく見てけりものいひかはしてかへりけり
みすもあらす見もせぬ人のこひしくは
あやなくけふやなかめくらさん
とあれは女かへし
見もみすもたれとしりてかこひらるゝ
おほつかなさのけふのなかめや

百六十九

むかしありけるなりかゝめのくちにてわかゝるみこなりし
をとこ女のきぬをとりてそのいろのめかりの中将て
けるにみえしけふのきぬをとらせやりて返しゝと
こゝろとてそれにこゝろしりかたきとくきつゝとほとし
すへのまれにはつゝにみえしけるゆゑもかりきりさ
ほとけの時に女のいひ座りけり

百七十

いかやこうし人は世になりけるを
まうでけれはかくそそのかしけり
ふかくさのみかどの御時良少将といふ人
いみじき時にてありけり いといろごのみに
なむありける しのびて時々あひける女おなじ
内にありけり こよひかならずあはむとちぎり
たる夜ありけり 女いたうけさうじて待つ
に おともせず めをさまして夜ふけぬらんかしと思ふに
時まうすおとのしければ きくに うしよつとまうしけるをきゝて
おとこのもとにいひやりける
拾遺 人心うしみつ今はたのまじよ
といひやりけるにおどろきて

百七十一

同上 ゆめにみゆやとねぞすぎにける
とぞつけてやりたりける しばしと思ひてうちやすみ
けるほどにねすぎにけるになむありける かく
て世にいみじく時にてありけるほどにみかど
かくれたまひぬ おほむはふりの夜 御ともにみな人
つかう
まつりける中に その夜よりこの良少将うせにけり
ともだちもめもいかならむとてしばしこそもとめけれ
おともきこえず 法師にやなりにけむ 身をや
なげてけむ [illegible]
[illegible] 思ひのくさ子
[illegible]

○法師の [illegible]

まかりはてゝゆかし母もいりしとおもふ
へし我を見てなくなりにしわかれの志けるには
よりはなれてはやなかれにせちけりこそわかれも
なれはなれにける思ひのみまかりけりことのはの
てこ来るをなかなかになりてこそうちのやのへ
はゝめてゝおほせにはおほかた御かにかなりてみのゝ
とめとどうちこそせんせんいひとおほえおかのわりき
てとうものゆゑにおほやけにかなれとおなしてわたる
けれはちちかはしをくなりのをそれなれはやしかね
風うけあるかくなりかはりいふよそにおはしまさは
なかんもあなひとはかりにおあるをもすれけ志ふる
もののあはれそのこともはやくへさうなれはをとこ

このみのわれうへと、おほけれくるけやかてとなく
こゝもならへしいなけにかはてくみおもひわはま
てこなすまこうかしこりそうしこもやしく座にす
なれなりけしかはけれのまへそてれうかなしとそ
そのかうなりわうてをうくやてよきなさかとこか
とかへくすこそうかのこをなにのことなることもの
うるしさこの神にもかゝうやうくなるまして
みとひとひねとよしのはうおうさ思ひとよなさ
わしてわしなにこれみのをなにと御のかく
思ひのまこりの御まそなんなさにもいみにあけから
のみうとことかのまのあへむわりけつとそ山ひ
むねそのあかりなれらしなりそめ童さらもせて

とぞ嫁がひてめぐられしとかや見えさせたまひて出家
かたくのぞみしかば母にもいまの御上人のもとにおもむき
おはしましてやうやうおかんりしかばふかくつとめ候ひし
てさすがにありがたくこそ
みかへんのちはいかがのこころざすありぬべきり
この事のはりとようれはぬせよ
とありみまいらせし女おほせにこたへまいらせ候ひしは
ひとへにそらしくをせんより〳〵むまれとなりし
御まへのくたしもかれてかんこそ人あまりおはしけ
これとかうのわ世をいふてゆくにもおもさまを
かくて世中にありしと云るを心しめさ
大象のさかのこゝやうらと称りとおはしのひせそ

山とれいも此世の御ふしにあらずとぞてうけいふぞ也
ぬ此わかはかにけしてうされけり御まへかまたの時
くいふそり思ひてくれわてさらにおもひつゝまりの
まいかへん気ふつるとくおぼせことにおかせ候
おかしまきの世にすまのゆるおほりしくへもからこ
と思ふさまりく世に出る勢のまことありてこえいひ候と
なんのかりしきおもての山にてしかおもふは物とを
こふおきひとりさることものを遊のあらわどもに候は
し給おもはせるに出家のきはまことにしく家に心もるか
こさまさる様かくるにかれはありくるかへりの心もらしん
とさまうしよそへてたにはつうらてかとき故さ
まりてたん気りことなるとのふかはせいかなたすへうら

なれて侍りけるにまかりてけるかりぬみことの
宮道のきよしといふものかたらひておはりし御さ
ぬ世にありしとあひつきてこりしも去侍りけり
はりける山の寺に参りて侍りて去ぬれど
まてとふらふあふまじきことかへれやしきる
いのちめくらむの法のいとよりしはさせのいのち
ときのまの侍るものにいと長れ侍る時も侍るも
なく

たりなれたゝ井手のそこにかへるとも
人をとふらふとはさやわ
とおりけりときりしめて心よみつかはしけるの
かへらすとちきりしかども地にすすめの

今はむかし井手のわたりにおなじ女のなんありき
おはしけるおはしまして時の帝のいとときにあり
思ひとふひ給ひて洞とよりけるになりにしと
てて時人のかたつてもかくなむ出ておもひれて
かくえぬことひろひりてく法師となりて
いそくおもつりしとえんのてりけりせうがありり
きよのの宗とやとなりみなかさ女へたまし
つるかくなれかさ家ありけるとの宗の河ありてくさ乃
せうとそこなひつきて文徳まりまりわたりて
みなくちおとりとのこまりと云人宮月におきさ
つおまつておりかへかなかむしててさふかおとや
うたうえれまうしの子なまてしとてみし給へかな

むかしのことゝもありもやありて源中将かやうに
てんしやうにてこせうのひとつてにかくし
なかしかさなりけれとゆひつけたりけれはゝに
かくとおもひかくて猶くに〳〵ちこへたまひさ
くのそれは良少将なりけれはかの人よるへし
りしおほきおほいまうちきみのみやすんところ
ふかくさのみかとゝきこえけるときにけるおなし
らしけれはこそ
後撰 いのちのうちにたえてもすまなむとはかり
ことしのこるをしのひはさなん
とふやわすれしはる風をふけそ
ものもえたのこそ
同上 ねさそのいふこそはなかりしに

ここのえそうとし僧さかさの初ん
とかくはなかさかにおほかりきりとなんてな
なにかくらむしやかにわかれて御やりん
思てかるよのみなしきすまうにはかりそれのこそ
かしのさほてつたふかけてなせにかりかくてうせ
ふけのたいふ少将になりて花山といふてらにすみ
僧正ひそかにそれの御まへかけの時の子ともあわりを
里太郎左近将監にて殿上してありけるかくに
なんとをりにとよをそむくとて母に申けれは僧
ありけりまたふたりの子は法師なりけるそ素性と
てこれは法師になしてなむありける
後撰 おりつまむたかさきりしのかたてかへる

みよのみかけてたのまれくるかな

百七十四

とうゐんそうしやうのみかとのみことお
こしかはなきひとのたいふのなかにかはりてかはりけれ
つまとかはおやのかたきとゝおもひて京にありてかはれなれは
りさけははとゝのたまふくかはしのむかひにほん
の国におもむかんとそしつきけるをきこえかゝ
ひとつにありかやうつきて男も女もしすなかく
つかしうかひて出たまふとせはありかなるに山に
あちうしてかゝくこそあかなひて見せさいゝき
ひさまうかりてしけさかまへせうそしかと
んなのまとうしかは山のかりけりけるをこのみし
むとうふかきそのかうかとしくうらやすん

ありけるにさるのなかのにかへつけりきぬかは
まへよりのほりきにけるにこそおこせたる
あまのはらのかはにかはりてけりかへり
をちなりけりとはせうなの兵衛の督はらかたる
へはやりけしみつけてかはりまとへなにかえは
おほかなく京極のうへにてなかれのまかれ

古今著聞集
可考
百七十五

むかしうとねりなりける人おほみわのまつりのつかひにて
やまとのくにゝくたりけるに井手
といふわたりにきよけなる人の家より女ともこともいてきて
このゆく人を見るきたなけなき女いとをかしけなる子を
かきいたきてかとのもとにたてりこの子のかほのいとをかしけなりけれは
めをとゝめてその子こちゐていませといひけれはこの女よりてきたり

してこのかへしは女よりなむありけるそれを見てかの
いとおかしけなりけれはゆめことゝおもひて
まれにあひたる人のおもはさりけれは物思ひける
これといひておくりけるしかありてなをひとこと
まてきこえさりけれはこのあるしおなしことを
ゆきていひけれはさはかりゆひてもえせてい
ねよとこそはいひけれとこの男ことなく
まけてかへりにけりこれをこそおもへと
まかりけりいひたりける男はすゑによし
七八年ありて又おなしやうにいひやりて
御かへりてまたおなしかりにきこえけるに
いまゝて井ゐなかしつかにおはしましける

いひたる
このみちのほとのさまに中将の御むすめ
右の別当大臣の御むすめになむありける
ことのほかなるをかしき君のありけるを
思ひなむあはれなるをみつけて
乃酒なるなにかしのなにかし
わか御むすめの大臣の御命婦なり
わか紙屋のいとよき所にありけるを
さけなといひける男なりけり
とわれ六日ゆくあるの命婦のもとへ
いひてやるになくなりぬれはいみしき
のみこそすくしけるにやあるらむ

いはの花のおもてにおまへりしのおもかげの時よ武士に宝
かつはおもへり行ありての宗にやまひいはれしさ
らむ後をもの如くあひれはとありおく心が
このむ人おもく女のと秘しうあそれしと分けきを
里行まゐとつゐにおもておもしらぬ宗をやあと
ひとしまゐ夜人のうらかにてゆかしれ
宗かりてたてて身持りこれをすまゐ
とひやりなれ給ゑし
かしのこの乃なとねおもひてあるりのを
名ゆかいれうえうなりまり
とありなくてひさうし系り給ふさけ若御
申女はとかたうまるらひかなりいはかゐらら若衆なれ

こうかさりかんの分にも思て世をくらぬ夜はのりて
関は系りふなの花老乃おんなかの夜をたれて
まうつ人をもひそくいそいかおもの君にりのこさ
えんといひあれあやしきさきおれ里ゐと思ゆる人
乃う清のは思のふなすと云すひていりね又まさ
まゐおりは云ひさ夜上おもとおやおもしまた
れといそて云え云んおと云ていりね深ゐてあり
えのこ夜さうもいりけうと思のもひされん
あやしと云ひとくうりけかおもひとえもおかし
まれと云ひかおもりまりかとひかれいとせうかに
あしと夜きてまゐて夜まりへ分んまりれうさ
こさうしかへとゐけまゐいはとやはうさるまおりさらく

[illegible]

百首

源氏明 [illegible]

元明 [illegible]

庄司 [illegible]

すゞしありてんやうてつせ行うかりての渡
まこの所のかしすめてはさりやうをとなくま
て蓋のうなりありしろきをとらへて中まうけれつ
うちつまりたり上乃うえしかおもそまてかま
う里をりてなくなみもすゑさされりけき
かりしゆすくの祖は上人のかはしはかくそ坂
はなかぬそしらひより流しの車をさ入こを絡てか
みはえてかれはからそとこを行をれ人てらひゑは
うちらそれとゆをかくふうしともかゝり
かさきさうもいゝさししと申まとう
ともあれそれはかめて行くかれとめりく
ゐくかもの行てうてせかしらの

おとこのむすめのおやなしにかはらかに筆をり
めくあいたりよりさのかたしかにたつくま
てみつられは家ちりかへもろく髪をかうゑ
そうかくかまとこともとかしなりのて
これなるのまに掛りとおしう道さりみるとかく
人のそみしぬ手の内よりかのこなとれ
のたまてそれけふりてえれなりうかり髪長
さりかれとこゆかるうゐ
よまさゝのくかまてうるてとも寛の
ひとそてなくやなまとるまゝれ
とひとりこゝに物
うさまてとしかしかま孫はうくひきの

君ゆり由しとやしつくれなく
とゝ思をしてそて以いハ女をとゞろきて今てかしと云
つくおもひきて面をみしにぬるものと見て拝ていはれ
かりぬ男これかのかりてのあかうる拖乃さまかね
面のまりかゝ約つまへやむますてかくてかれとゝそ
かたらふりハかりまりてかれらく宇中しこいへかり
時ハ正月十日の頃とかりかりすのかゝより志と称さ
りてたりふせてかかすをもつりかへかりかな
はまてかとかし内の君かひかんいままハ苗覚えて
たてかとゝうりそれを口かけいはまいりやかてゝ苗
ねまハやそうすへりかてこのゑをかゝみとは面を女く
やまとまそとせいすゝてやすもかゝて云ひ申し面云

夜ひとよかりかしてゝ又乃れはめてそすゝしき
もつら男ハ女のつれなくすらをかれてそてほす
日くれゝはかまた八式女のもとやかねまかりすきてこの
かりかれハこゞ姉りこそぬめてかりけるかなき
い井さうるかして酒とのませておかねかいひろさ姫ふ
せうかしをほらそしてむしわとハふのかしくたちそうん
かよりてらしかれ材の花のさうりかつをおりてその
花ひかかなをかまをかう女の手にかくかがあり
こゝろうれあしろをハすそをぬうしつ
ころの形をかいそて行あうまうるかそ
男これをみうかいと家ふ覚えてふせてふた女かりか
うちかうしと思てかれたりかねをとさてこご姉りか

此ヨリ以下三段
手本ニアリ

きこえしらせて引車にてゆめかりちきぬくかすそ
こそかくむすめのわたりいふ文しおこせなんとしてなそ
きよりことかしすゝみしもゝひとり弟のおく
つとめて又来たてもしおめゝとありてたりけるこ
思ふらく日月をつくしはてけるまことし君かおもひそらく
きなりてかゝんせをたゝとかひて法師になりにけり
かくのちのこおけるわれひかつゆくとて
きてゆきかかりやのみやにかよひける
うかゝりあのあさのけしきなり

大和物語下終

慶安元孟春仲旬
二條通玉屋町村上平楽寺開板

泊酒舎藏